



飢えた少女

～腐乱～



## プロローグ 処女膜貫通 遠山 紗月

---

中学生になった。入学してから二週間で私はレイプされて処女を失った。

しばらく日が経ち深刻な問題も発生した。両親に全てを話した。面倒だから出て行けと言われ、家から追い出された。叔母さんの家に行った。また全てを話した。叔母さんは言った。

「家に金を入れるなら、飼ってやるよ」

私は言った。

「お金はちゃんと稼ぐし、自分の事は全部自分でやります。高校を卒業するまで、よろしくお願いします」

「分かったよ。ただし、少しでも変な事したらぶっ殺すからね」

叔母さんとの二人暮らしが始まった。そして私の援交人生も始まった。

## 第一話 うんこ野郎 桐崎 玲治

中学一年生の六月。期末試験中にうんこ漏らした。大多数の予想通り俺は引きこもりになった。両親は困った。そして、「引きこもるのならば更に引きこもらせてやろう」という逆転の発想の元、俺を部屋の押入れに閉じ込めた。

押入れの扉は木製。固い。殴って穴を開ける事は出来ない。扉には分厚い木の板を打ち付けられている。どうあがいても破壊する事は出来ない。押入れの中は真っ暗。扉の中央に直径十センチほどの穴が開けられており、その穴からペットボトルやおにぎりが支給される。

ここまで本格的な引きこもりになるつもりは、なかった。

引きこもりを始めてから多分一ヶ月が経った夏のある日、遠山紗月が部屋に遊びに来た。紗月はビッチになったとか援交しまくってるみたいな噂が絶えないが、俺は信じていない。

穴の向こうに紗月の顔が見えた。長い黒髪に大きな目。紗月が叫んだ。

「玲治くーん。遊びに来たよー！」

「うんこ野郎になんの用だ」

俺は真っ暗な押入れの中で膝を抱えた。わざわざ家までやって来て、笑いに来たのか。

記憶が頭に突き刺さる。大事な期末試験。突然お腹が痛くなる。なんてこった。トイレに行きたいですが言えなかった。カンニングに間違われたらどうしよう。問題が全く分からない。焦る。腹痛い。脳みそフル回転。腹に力を入れて踏ん張る。青ざめる。脂汗が出てくる。何も考えられなくなる。頭が真っ白になり、うんこ漏らした。

クラス中が爆笑と悲鳴に包まれる。俺は教室から飛び出した。廊下で崩れ落ちた。罵声が飛び交っていた。悪口が怒涛の勢いで聞こえてきた。俺はまるでノーガードのボクサーのようだった。一部の生徒たちが教室から溢れ出てきた。大勢の顔が俺を見ている。幼い顔にへばりついた強烈で不敵な悪意満点の笑顔。罵詈雑言。あの光景は忘れられない。

罵詈雑言くらいなら、時間が経てばある程度は忘れられる。傷もそれなりには癒える。数年も経てば言われたセリフも忘れるだろう。

でも。

俺を見ていたあいつらの、あの、悪意に満ちた笑顔が頭から離れない。怖かった。人はあそこまで悪意に満ち溢れた笑い方が出来るのかと。

もう見たくないのだ。あの笑顔を。

「玲治くん。外に出る気はないの。お母さんに言わないの。学校に行きます。外に出ます。だから、押し入れから出して下さいって」

「押し入れからは出たいけど、外には出たくない。外に出るくらいなら、押し入れに居た方がマシだ」

「なんで」

「うんこ漏らした」

「転校すればいい」

そういう問題じゃない。どこの世界にも俺が見たあの笑顔をする人間は腐るほどいる。それが問題なのだ。

「なんか食べたいものとかあるー？ 買ってきてあげるよー」

紗月の声につい反応する。

この一ヶ月、まともな食べ物を与えられていない。おにぎり、菓子パン。キュウリ丸ごと。人参丸ごと。いやでも。

「俺にたらふく食わせて、ここでクソ漏らせるつもりだろ」

「なんでも買ってきてあげるのに」

「……ハンバーガー」

紗月が「はー？」と呆れた声を出した。

「うな重とかさー。もっと何かあるじゃん。私お金結構持ってるよ」

「お小遣いそんなにもらってるのか」

「ハンバーガーでいいの？ 他に何か食べたいものあるでしょ」

「入らない」

「は？」

「直径十センチ。ハンバーガーが限界だ」

「穴から箸伸ばして食べさせてあげるよ」

「……ハンバーガーでいい」

紗月は部屋から出て行き、二十分ほどで戻ってきた。ほのかにハンバーガーの匂いが漂う。

「投げるよー」

穴の向こうからハンバーガー、ポテト、ドリンクが次々と飛んでくる。匂いを嗅ぐだけで失神しそうだった。俺はあっという間に全て平らげた。

穴に顔を近づける。紗月は床に座ってタバコを吸っていた。紗月がこちらを見る。俺は慌てて穴から顔を離し、あぐらをかいた。

紗月が言った。

「玲治くん。どうしたら外に出してくれるの？」

「俺が外に出たら、お前らにメリットはあるのか？」

「お母さんが言ってたよ」

「ん」

「家があるから引きこもるんだわ。だから家燃やしちやいましょう。引きこもる場所がなければ引きこもれない。アンタのお母さんならやりかねないよ」

「親は俺がうんこ漏らした事、知らない」

「そうだね。確かに玲治くんが引きこもってるのはうんこのせいだ」

「そう、うんこのせい。人はトイレする場所を間違えただけで、人生が終わる。俺は犬になりたい」

「でもね、玲治くん。トイレ行く時しか押入れから出してもらえないでしょ？ それじゃ玲治くん、ある意味では今もうんこ野郎だよ」

「それは、俺もちよっと思ってた」

「明日も来る。考えておいて」

紗月は部屋から出て行った。

冷静に考えてみた。クソ漏らして引きこもりになり、あろう事か押入れに閉じ込められている俺は近年稀にみる人生の墮落者だろう。まさにクソ野郎だ。しかしそんな俺に構ってくれる同級生の女の子が居るとするのは、恵まれた事ではないだろうか？

そう、俺は恵まれている。まだ可能性は残っている。前に進んでいいんじゃないか。そんな気がしてきた。

翌日も紗月はやって来た。長々と説得された。転校して新しい人生を歩めばいい。親にはいじめられたとか、適当な理由を言えばいい。俺は紗月に感謝しながらも口では反抗ばかりしていた。人間が怖い。

「玲治くん。このまま人生を押入れの中で過ごすの？ なんのために生まれてきたの？」

「うんこ漏らすような人間が、この先楽しい人生過ごせると思うか？ 俺みたいな奴はどうせ、受験失敗して底辺の高校行って、就職出来なくて、フリーターになって、三十歳ぐらいになってもまだフリーターで、皆にバカ

にされて、結婚して子ども産んで幸せな人生送っていく周りの人間を指くわえて見てるだけ。気づいたら、事故かなんかで死んでるさ」

「うんこくらいで絶望しすぎだよ、玲治くん。むしろこう考えるのはどう？ 学校でうんこ漏らしたのにも関わらず、挫けず踏ん張って立ち直れるような人間は、この先どんな事があっても挫ける事はないだろう……。ほら、そこんちょそこらの人間よりもタフな人間に思えない？」

「踏ん張る力が無かったから、俺はうんこ漏らしたんだ」

「ねえ玲治くん。まさか本当にさ、一生そこにいる気じゃないでしょ？」

「紗月」

「なに」

「俺は劣等感のカタマリなんだよ。お前、うんこ野郎と付き合いたいと思うか」

「思わない」

「そうだろ？ 思わないだろ？ 俺はもう、ダメだ」

「だから、転校すればいいじゃん。相手が何も知らなければなんて事ないよ」

「何度言わせるんだ。相手がどう思ってるかって話じゃない。俺の気持ちの問題だ。俺はこの先ずっとうんこ野郎として生きていくんだ。転校して、好きな女の子が出来ても俺は絶対まともに話せない。告白なんて論外。事あるごとに思い出すんだ。ああ俺は、うんこ漏らしたんだって」

「いやだからもうしょうがないでしょ。生きてりゃ一度くらいはハンパじゃない失敗するもんだよ」

「人生は一度の失敗で終わる事がある。例えそれがクソもらしても」

「だから、終わってないってば。アンタが出てくればまた始まるよ」

「これも何度も言ったけどね、紗月。俺はあの皆の顔が頭から離れないんだ。なあ、人間ってさ、あんなに不気味な顔が出来るんだな」

「玲治くん」

「なに」

「私は、貴方よりも人の怖さとか、知ってるよ」

紗月は帰っていった。いきなり何を言い出すのか。紗月が俺よりも人の怖さを知っている？ そんな訳、ないだろう。

次の日は紗月と、紗月のお姉さんがやって来た。沙織さんに会うのは始めてだった。確か五歳年上だから、沙織さんはいま十七歳くらいか？

穴の向こうを覗くと、沙織さんが頭を下げていた。

「玲治くん、はじめまして」

「はじめまして。うんこ野郎です」

沙織さんが穴に顔を近づけてきた。年相応のあどけない顔をしているが、どこことなく色っぽい雰囲気もあった。紗月と同じ綺麗なまっすぐ黒髪ロングヘアだった。

「ねえ玲治くん。私の友達の親がね、カウンセラーやってるんだ。どう？ 会ってみたい？」

「カウンセラーにうんこ野郎の気持ちが分かるんですか？」

「でもね、玲治くん。このまま永遠にドラえもんみたいに押し入れで寝起きする訳にはいかないでしょ。転校して、楽しい学校生活送りたいくないの？ もしかしたら可愛い女の子と出会って、付き合って、エッチ出来るかもしれないんだよ。そういう可能性を追いかけてみたくないの？」

「みんな同じ事言う。どいつもこいつもうんこだ」

紗月が怒り気味に言う。

「せっかくお姉ちゃんまで連れてきたのに……。ねえ、お姉ちゃんに頼んでカウンセラーの人、紹介してもらお

うよ」

「カウンセラーって占い師みたいなもんだろ。俺は皆が嫌いなB型だ」

沙織さんがため息をついた。

「ダメね。完全に自分の殻に閉じこもってるわ。精神的にも、物理的にも」

うんこは放出しましたけどね。

俺はもう出るに出不る状況だった。二人の女の子に心配され、説得されている。俺は落ちる所まで落ちた。恥ずかしい。とにかく、恥ずかしい。

紗月がひときわ大きなため息をつき、呟いた。

「ねえ」

「なんだ」

「もうめんどくさいから、ぶっ壊すね」

「え？」

何やらガチャガチャと物音が聞こえてきた。紗月の楽しそうな声が聞こえる。

「実はこのギターケースの中にねー。凄い物が入ってるんだよー」

沙織さんがワクワクした様子で言った。

「へえ。何入ってるの？」

「えへへ。えっとね……」

俺は唾を飲み込んだ。何をやる気だ？　すぐに沙織さんの悲鳴が聞こえた。

「うわ、マジでー！？　これどこから持ってきたの？」

「技術室から盗んできた」

「さっすが紗月！　やっちやえやっちやえ！」

俺の心拍数は最高潮に達していた。マジで何をやる気なんだ？

「いくよー！　電源オン！」

キューーン！　というものすごい音が響いた。この音はまさか……。

電動ドリル？

俺は驚いて出来るだけ後ろに下がった。直径十センチの穴の近くに新しい穴があいた。電動ドリルが貫通して目の前に現れる。やめてくれと叫んでもやめてくれる訳もなく、あっという間に新しくあいた穴と最初からあった穴が繋がった。そしてどんどん穴が大きくなっていく。

どんどん穴が拡張していく。穴が広がるにつれて二人の姿がよく見えるようになっていく。やがて人間が一人通れるくらいの大きさにまで穴が広がった。俺はもう呆然と座り込んでいた。紗月が言った。

「引っ張るよ。いい？」

もう、好きにしてくれ。

俺は二人にずるずると引きずられて、乱暴に床に投げ出された。俺は仰向けになり、泣いた。

「俺は外に出ないぞ。絶対出ないぞ」

沙織さんが頭をかきながら言った。

「そしたらまた押入れに閉じ込められるよ」

「それでいい。もう、どうでもいいんだ」

俺は無理矢理立たされた。紗月が俺の手を握る。

「まずは外を歩く練習しよう」

階段を降りて玄関まで行った。俺は駄々っ子のようにまた座り込んだが、無理やり靴を履かされた。紗月がドアを開いた。

「ほら、行くよ」

こうして俺は一ヶ月ぶりに外へ出た。まぶしかった。風が気持ちよかった。でも、怖かった。

紗月と沙織さんに両側から支えられながら歩く。奇妙な集団だ。俺はもう空っぽだった。人にどう見られても気にしない。どうでもいい。もうどうにでもなれ。

公園で休憩する事になった。俺はベンチに寝転がった。ずっと押入れの中にいたから筋肉がおかしくなっている。少し歩いただけで体が痛くなった。

紗月と沙織さんはジャングルジムの上に座って缶ジュースを飲んでいる。楽しそうに何か話してる。俺は何故だか、小さく笑っていた。二人を見ているとほんわかした気持ちになった。沙織さんは「私はもう、いいよね」と言って帰っていった。

しばらく俺達は黙っていた。しかし近くからざわめきが聞こえ、缶ジュースを口から離した紗月が舌打ちした。紗月の視線を追いかけて、俺は絶望した。

公園の出入り口に同じクラスの奴らが群がっていた。八人もいる。俺達を見て何か騒いでいる。いつも偉そうにしている奴が叫んだ。

「さつきー！」

紗月が叫び返した。

「なにー？」

「お前ら何してんのー？」

「な、なんでもないよ！」

同級生たちは公園に入ってきた。俺は起き上がった。心臓がバクバクと跳ねた。恐怖以外のなにものでもなかった。何をされる？ 近づかないでくれ。こっちに来るな。

同級生たちは俺の前で立ち止まった。紗月は慌ててジャングルジムから降りようとしていた。そして紗月が地面に降りた瞬間、同級生たちは大爆笑を始めた。そしてまた罵詈雑言が飛び交った。頭を蹴られた。腹を殴られた。ベンチから引きずり降ろされ、砂をかけられた。

紗月は震えていた。ふと思った。なぜ、紗月は俺を助けたのだろうか。昔からの友達だから？ それだけの理由でお姉さんまで呼んでくるか？ 電動ドリルまで持ち出すか？

もしかしたら。

紗月は俺に気があるんじゃないだろうか？

同級生たちはリンチをやめ、バカにしたように笑いながら紗月を見つめていた。八人の同級生に見つめられ、紗月は完全に動揺していた。また偉そうな奴が口を開いた。

「紗月。ここで何してんの？」

「え？」

「だから、ここで何してんの？」

「え、えっと……」

紗月はしばらく考え込んだ後、俺に近づいてきた。

ああ、そうか。

うん。そうだよな。

紗月が俺を見下ろしてきた。俺は笑ってやった。紗月は唇をかみしめた。

そして。

紗月は俺の腹を、踏みつけた。

同級生たちは歓声をあげた。紗月は勢い良く何度も何度も俺の腹を踏みつけた。腹の次は腕、足、首、そして顔を踏みつけられた。最初は辛そうな表情だったが、次第に歪んだ笑顔に変わっていった。

紗月は、みんなに受け入れられた。多分、援交のお客さんも増える事だろう。

## 第二話 百四十五人のAV女優を愛した男 宮田 広斗

---

八月一日。

床に横たわる父親は絶命していた。背中に突き刺されていたナイフから目を離さず、俺は電話をかけた。

「もしもし。警察ですか？」

ごめんよ父さん。悪意は、無かったんだけども。

もし言い訳をするとしたらそうだな、多分、いや間違いなく、俺が父さんを殺したのは、遠山紗月のせいだ。そう、紗月が悪いのだ。

七月一日。

学校から帰ってきてパソコンの電源を付け、イヤホンを装着する。これから寝るまでエロ動画を見て、見終わったらデートをする。これが俺の習慣だ。ジャンルは女子中学生モノか女子高生モノ限定。それ以外は見ない。

今日の相手は愛華ちゃん。黒髪セミロングで胸はDカップ。体は白く細く、笑うとえくぼが出来る。エッチは静かにゆったりとしたプレイを披露する。

愛華ちゃんのエロ動画を見終わり、俺はさっそくワードを立ち上げてデートを始める。

学校帰り。俺と愛華は公園のベンチに並んで座りお喋りしていた。もちろん手を握り合いながら。

愛華は色々な話をしてくれた。家族の事、友達の事、最近観た映画の事、将来の事。くだらない話から悩み相談まで、良い話も悪い話も全て包み隠さず話してくれる。強さも良さわさも吐き出してくれる。それがどんなに心地良い事か。もちろん俺だって何でもかんでも愛華に話せる。辛い事があっても、愛華が側に居るという事実だけで、生きていける。愛華がいればそれだけで世界が完結するのだ。

公園の近くをアイスの販売トラックが通りかかった。

「アイスだって」

「アイスだな」

「ああいう所で買うと高いのかな？」

「多分。でも、普通の店よりも美味しそうに感じる」

俺達は財布を開いた。愛華の財布には五百円。俺の財布には四百八十円。

「買うか」

「うん！」

俺達はトラックを呼び止めてアイスを買った。またベンチに座ってアイスを舐めた。

「そうだ。ねえこれ聞いて」

愛華はブレザーのポケットから音楽プレイヤーを取り出して、突然顔を近づけてきた。イヤホンの片側を俺の耳に刺した。自分でイヤホンを耳に刺しても何とも思わないが、愛華に同じ事をやられると死ぬほど気持ち良いし、くすぐったい。良い匂いもした。

イヤホンからは愛華が最近ハマっているという音楽が流れていた。曲名はスティル。意味は分からないけど、良いタイトルだと思った。愛華の口から「スティル」と発音されるだけで頭がぶっ壊れそうになる。良い感触だ。

愛華はもう片方のイヤホンを耳に刺した。アイスを食べ終わると、頭を俺の肩に置いた。心臓の鼓動が早くなる。俺は首を少し曲げて愛華の方を見た。愛華も首を曲げ、上目遣いで俺を見た。顔を近づけ、俺達はキスをした。

ワードを閉じる。楽しいデートだった。家の近くを、焼き芋の販売トラックが通りすぎて行った。いーしゃ〜



きいもお～。おいもっ！

七月二日

俺の父親はIT系企業の社長をやっている。高校生になったら父さんの会社でバイトを始めて、卒業と共に入社する事になっている。学生時代からバイトをしていれば社員と馴染む事が出来るし、仕事をする上で必要な知識を得る事が出来る。例え親の七光りであっても、高校生の頃から努力している姿勢と知識を見せれば社員も息子を受け入れてくれるだろう。父親はそう考えているらしい。

宮田家では二十歳になったら家を出て自立する事になっている。つまり俺は高校生から父さんの会社でアルバイト、卒業と同時に正社員へと昇格、二年間実家でのんびり暮らし、二十歳で一人暮らしを始めるといいう人生がもう決まっている。言い方を変えるなら、俺は既に就職、自立という人生の終着点が決まっているという事になる。会社が倒産する可能性だってゼロではないが、それは全ての人に言える事だから、気にしていてもしょうがない。

そんな俺が毎日する事は何か？ 答えは簡単だ。どこでもいいから高校に通えるくらいの学力を保つ事、会社で必要なパソコンの知識を得る事、つまり勉強。そして何より、エロ動画を見る事である。特別な鍛錬や夢を追いかけるような事をする必要はない。

俺は頭悪いし、運動神経悪いし、顔はブスだしニキビだらけだし、体は細いしスポーツに興味の無い完全なインドアだし、趣味はゲームくらいしかないような男。早々にして就職先が決まり未来が確定している俺は勝ち組だが、こんな人間だから唯一手に入れられない事はもちろん多々ある。

その中の一つが、そう、女。俺みたいな男が可愛い女の子と仲良く出来る日は永遠にこない。だから俺はパソコンの中で学生モノのエロ動画を見て、妄想でデートをするのだ。大人になったら多分、OLモノに手を出すだろう。

学校ではおとなしくしている。中二の夏は静かに過ぎていた。俺のまわりで静かじゃないのは遠山紗月くらいのものだった。遠山は中一の春頃から援交を始め、気が向けばタダで同級生とエッチをするようになり、夏頃からはいじめっ子グループと仲良くなって強烈ないじめっ子になった。最近はいじめがエスカレートしてきて、昼休みにとつぜん地味系男子の携帯電話を奪って床に叩きつけたりする。ビッチにも歯車がかかり、クラスの童貞率をどんどん低下させている。

朝のホームルーム。俺の後ろにはいじめの先頭集団がたむろっていて、ゲスな笑い声をあげながら遠山自慢をしている。遠山とこいつらが仲良くなったのもやはり最近の事だ。

「昨日、紗月の家に行ったんだ」

「へえ」

「紗月の奴さ、なんかセンチメンタルになっててな、ベランダの柵に寄りかかってぼんやりしてるの。俺の事無視して。だから後ろから近づいて胸鷲掴みにしてやった」

「紗月ってやっぱ胸でかいのか？」

「まだ中学生だからなあ。でも高校生になればDくらいになりそう」

「食っちゃえば？」

「は？ 食ったに決まってるだろ。あいつ部屋にコンドーム常備してるぜ」

ビッチとしかエッチできない可哀想な野郎達だ。今日は早く帰って、俺だけを見てくれる女の子とデートをしよう。

昼休み。遠山紗月がキレた。遠山はルイヴィトンの財布を開いてお金を数えていた。教室の後ろでは地味系

軍団がじゃれあっていた。地味系の中でも特に地味な男子が走りだした。遠山にぶつかった。財布が落ちた。もう人地の地味男が追いかけてきた。財布を踏みつけた。遠山を噴火させるには十分な行動だった。

遠山は財布を拾うなり罵詈雑言を浴びせた。それに応じてクラスの奴らも暴言の嵐を浴びせた。遠山は調子づき、教科書やノートで地味男の頭を八十回くらい叩いた。昼休みに登校してきた佐伯可奈子が遠山を止めるまで、暴言と暴力は続いていた。

羨ましかった。ああやって人に暴言や暴力を浴びせられるような立場に、俺もなりたい。早く家に帰ってデートがしたい。

七月五日。

今日の相手は由実ちゃん。見た目は中学生にしか見えないけど、これでも立派な高校生。丸顔童顔。幼児体型。そのくせエッチはなかなか激しく、攻撃的だった。リスミみたいな瞳をこちらに向けてキスをせがむ様子は、本当に、見てるだけで幸せで、温かい気持ちになれる。

再生が終了すると、俺はすぐにワードを開いた。

海辺の町。穏やかな日々。長くは続かなかった、幸福の日々。

俺と由実が住宅地の道路を歩いていた。坂をゆっくりと下っていく。坂の向こうには海が見え、青空では太陽が輝き、色々な方向から蝉の声が聞こえ、潮風がふんわりと立ち込め、熱気に汗をかき、元気よく自転車を漕ぐ小学生やアイスを食べながら歩く女子高生とすれ違う。

「宮田くん」

「うん？」

「結局、泳がなかったね」

「ああ」

俺は札幌から由実が住む九州の海辺の町に転校してきた。それが中学二年生の四月の事。俺と由実はすぐ恋に落ちた。でも俺は夏の終わりと共にまた転校する事になっている。

「札幌に帰るんだよね」

「ん」

「冬休みとか……。いや、無理か。九州まで来るなんて」

「さあ」

「宮田くん」

「なに？」

駅前に着いたところで、由実が立ち止まる。

「元気でね」

「由実」

「なあに？」

「俺の事は、忘れた方がいい。他の男を作れ」

「そんな……」

「本当はもっと長い間九州に居る予定だったんだ。でも、予定が変わった」

せめて高校卒業まで九州に居られれば、九州の大学に行くとか、なんとかして由実と過ごす事が出来たのに。

「由実、じゃあな」

俺は駅へ向けて歩いた。後ろで由実の泣き叫ぶ声が聞こえた。俺は駅の中に入った途端、泣いた。もう、由実と会う事はないだろう。そしてたった少しの時間が経てば、由実俺を忘れて他の男を好きになる。この海辺の町での記憶も、ただの淡い思い出となって、胸の底に沈んでいく。

俺は涙を流しながらワードを閉じた。由実、さようなら。

人はたまに辛い恋を経験する。でもそれは人として当たり前の事である。常識といってもいい。それに人間は一人で生きていけないから、どんなに傷ついても悲しくても、また懲りずに恋をする。それが、人として当たり前の人生。

携帯のバイブが鳴った。クラスの地味男子からメールが来ていた。

『ついに買ったぞ!』

添付されていた画像を開く。美少女アニメのフィギュアだった。

七月八日。

遠山紗月は最近金遣いが荒くなった。同じクラスの佐伯可奈子は「親に虐待されてるのかも」とか根も葉もない噂を口にしていた。遠山の体に傷は見当たらない。佐伯は遠山紗月と幼稚園時代からの付き合いらしいが、最近二人が仲良さそうに話してる所は見た事がない。

遠山は最新の携帯ゲーム機を両手に持ち、必死に手を動かしている。佐伯可奈子が遠山に近づき、言った。

「金持ち」

紗月がバカにしたように笑った。

「悪い？」

「援交ばっかして。いつか病気になる」

「いいよ、別に」

「なんか、悩みとか、あるのか」

「ねーよ。死ね」

「あ？ 目ん玉えぐるぞ」

「やってみろよ」

「その口ホチキスで綴じてやろうか」

「だからやってみろよ」

「今日お前んち遊びに行くわ」

「は？ 私ん家知らないでしょ」

「中学生になるまでに何百回も言った。記憶力はいい」

「あの家はね」

「お前なに言ってんだ」

「可奈子」

「なに」

「近寄んな」

なぜ遠山は幼馴染の佐伯を拒否するのだろうか。なんとなく、わざと拒んでいるように見える。まあ、どうでもいい。俺は遠山みたいに頭のおかしな女とは絶対に付き合わない。

七月九日。

遠山紗月と似ているAV女優を見つけた。身長は百五十五センチほど。後ろ髪はケツまで届くほど長く、もみあげもやたらと長い。前髪は目にかかるくらいまでに垂れている。

女優の名前は未月。名前も似ている。

二時間近い動画にくぎつけとなり、時間が過ぎるのも忘れて鑑賞した。未月はなかなかエロい女だった。清純そうな顔とギャップのある子は好きだ。

鑑賞が終わるなりワードを開く。毎日デートで忙しい。

俺は未月の膝の上に頭を置いて寝転がっている。最近嫌な事が沢山あって甘えたい気分だったのだ。未月は俺の愚痴をなんでも聞いてくれる。愚痴や弱みを全て聞き、受け入れてくれる女の子と付き合っている事がどんなに素晴らしいか。世の童貞共に語って聞かせてやりたいものだ。

「大体さ、髪が長い長いって言うけど、俺はそんなに長くないんだよ。担任はいつも言うんだ。私のようにスッキリした髪型にしなさい。短い方が良いに決まってるわよって」

未月は優しく俺の頭を撫でる。

「担任の髪型ウケるぞ。ほんの僅かな髪の毛が頭に張り付いてるだけなんだ。あれは短すぎてキモい。あんな髪型にしたらいじめられるよ。あいつは年寄りのクソババアだから、考え方が古いんだよ。髪型は短くあるべきだと思ってる、少しでも長い髪型が嫌い。それに年寄りでオシャレなんかともう無縁だから尚更、髪型に関して興味がないから、他人にも自分の価値観を押し付けるんだ。髪を切らないと親に言うとかほざきやがる。で、しょうがなく髪切ったんだけどこんな髪型じゃあ未月、俺は落ち武者だよ」

未月は俺のはげ落ちた頭を何度も撫でる。こんな気色悪い髪型になっても未月は俺を好きでいてくれる。

「でもさ、こんなくだらない愚痴を言っても皆相手にしてくれない。未月が居てくれるだけで俺は幸せだよ」

「その髪型も、カッコイイよ」

未月は人差し指で俺の唇を撫でた。幸せだ。現実の遠山も、彼氏と二人で居る時は普通に戻るのだろうか。それとも、変わらないのか。

七月十一日。

自慢の長髪をばつさりと切った落ち武者の俺は、教室の隅でおとなしく椅子に座っていた。今日は朝からワカメと昆布とひじきを食い過ぎたせいでお腹が痛い。

今日は席替えが行われ、遠山紗月が前の席になった。授業中に遠山が突然振り向き、右手を伸ばしてきた。手には丸められた紙切れが握られていた。俺はとりあえず受け取り、開いた。紙切れには『好きな体位はなに？』と書かれていた。いきなり後ろの席に座っている佐々木という男子に背中を蹴られた。

昼休み。俺は佐々木に張り倒された。起き上がるとまた突き飛ばされ、俺は壁に背中をくっつけて震えていた。佐々木は相当キレていた。

「紗月がお前に手紙なんか渡すわけねーだろ。アホか」

佐々木は何度も何度も俺を小突いた。どうせなら思い切り蹴り飛ばしてほしい。幼稚な攻撃をしつこく繰り返される方がムカつくしなんか悔しいのだ。

「おい」

漫画のような事が起きた。佐伯可奈子が俺の正面に立ちふさがったのだ。

「お前らがそういう事すると、紗月がつけあがる」

遠山は遠くで俺達の事を見ていた。佐々木はものすごい形相で睨んでいた。そして近くに置いてあった椅子を掴んだ。その瞬間、佐伯は身をかがめてタックルを食らわせた。佐々木は吹っ飛んだ。もちろん佐々木は発狂した。

「てめー殺されて一のかー！」

「おう殺されて一よ。ほら、殺してみろ」

佐々木は勇敢にも仲間の援助を求めず、一人で佐伯に突進した。いつも紗月にお金の援助をして、エッチしてもらってるくせに。

佐伯は佐々木の顔面に唾を吐きかけた。佐々木が立ち止まり、叫びながら腕で目をこする。その隙に佐伯が渾

身の右ストレートを顔面に八発叩き込む。佐々木、ノックアウト。

いじめっ子の奴らは憐れむような目で俺を見ていた。

おかしい。

なぜ自分たちで俺をいじめておいて、女の子にかばってもらった俺をそんな目で見えるのだ。それはあまりにも、理不尽だ。

七月十四日。

遠山沙織に似ている女を見つけた。俺はクラスメイトのブログをこそこそ読む事があるのだが、遠山紗月のブログにはよく姉の遠山沙織が登場する。だから遠山の姉の顔はよく知っている。リオというAV女優は遠山沙織と瓜二つだ。

名前だってサオリから取ってリオにしたのではないか？ 俺は画面を凝視した。似ている。めちゃくちゃ似ている。

遠山のブログに掲載されている遠山沙織とリオを見比べてみた。そして気がついた。頬の同じ位置にほくろがある。去年の七月二十五日の記事では、沙織の後ろ髪は背中までである。しかし九月二日の画像では肩までになっている。リオが去年リリースした作品を調べた。九月までに発売された作品では沙織と同じくらいの長さだが、十一月に発売された作品では沙織と同じくらいの短さになっていた。

もちろんAVは撮影してすぐにリリースする訳じゃない。作品を世に出すにはそれなりに時間がかかる。だから少しくらい髪型が変わるタイミングに誤差があるのは不自然じゃないし、むしろタイムラグがあるのが当然だろう。

これは、やはり。

頭がおかしくなりそうだった。遠山紗月の姉ちゃんがセックスをしている。同じクラスの女の子の姉がAV女優をやっている。

やばい。これは、かなり、やばい。

俺の妄想世界に現実世界が入り込んでくる。マジでそういう気がした。

リオのAV動画はなかなか良かった。リオは百四十五人目の女だった。何故だか知らないけど、もうリオ以外のAV女優は見られない気がした。

恐る恐るワードを開く。俺は、リオと、デートが出来るのか？

神社で行われる夏祭りも終わりが近づいてきた。俺とリオは階段に座って休んでいる。リオは俺が買ってあげたりんご飴を舐めている。どことなく寂しそう。

「宮田くん」

「なに？」

「もう終わるねー」

「ああ」

今日は食って食って食いまくって、笑いまくって、本当に楽しかった。でもお祭りはもう終わる。盆踊りのも終わってしまい、子どもたちは親に連れられて帰っていく。人並みは消え、さっきまで呆れるほどに賑わっていた神社は閑散としていた。残ってるのはごく少数の人たちだけ。店じまいをしている屋台の人もいる。

夏とはいえ夜の風は冷たい。暗闇の中で俺達は肩を寄せ合い、ただぼんやりしていた。

明日は学校。それが信じられなかった。年に一回の神社の方が現実的で、明日学校があるという事の方が、非現実的に思えた。

リオが唐突に、ぼつりと言った。

「明日さ」

「うん」

「学校、サボろうか」

「サボって何するの？」

「んー。分かんない。でも、明日学校に行くのは、なんかやだ」

私の家に来ない？ そう言われてリオの家に来てきた。

「親が居るから、バレないように」

リオは玄関から家に入った。すぐに一階の部屋の電気が付いて、窓からリオが顔を出した。俺は靴を脱いで窓から部屋の中に入った。窓際にはベッドが置いてあるからベッドに着地する形になる。リオがふざけて俺を受け止める。そのまま勢い余ってリオを押し倒し、ベッドに倒れこむ。

誰よりも幸せな夏を送っていると、強く感じた。

七月十八日。

遠山紗月の事が頭から離れなくなった。十四日以降、俺はエロ動画を見ていないしデートもしていない。理由は分かっていた。

俺にとってセックスとはAVの中の出来事であり、現実のものではなかった。しかしリオの登場で現実となり、始めてデートでエッチをしてしまった。

同級生の女の姉がAV女優をやっている。身近にいる人間と血の繋がりのある人がエッチをしている。これは衝撃的だった。ありえない事だった。もうエロ動画を見ても楽しくないと思うし、デートするのもくだらないだろう。

俺も本物を体験したい。そう思うようになった。貯金箱を叩き割った。一万五十二円入っていた。迷う必要はなかった。

遠山紗月に一万円を渡し、俺は童貞を卒業した。素晴らしかった。ハンパじゃなかった。死ぬほど気持ち良かった。それだけじゃない。ビッチないじめっ子として君臨してる紗月と寝たという事実は圧倒的な優越感を俺に与えた。女と一度寝ただけで、真っ白だった人生に色が付いたような気がした。これまでの人生がクソに思えた。俺の人生が始めて輝いた。これから先も輝きたいと思った。でも女の子と楽しむため、輝き続けるためにはそれ相応の努力がいる。少なくともエロ動画を見る毎日じゃ光は見えない。というかそもそも、どうして俺は毎日エロ動画を見ていたのだろうか。

何故か？ 理由は簡単だ。考えるまでもない。

中学二年生にして、俺の人生の終着点が決まっているからだ。人生の終着点が決まっているのに夢を見るバカはいない。

でも、父さん。

俺は、夢を見たい。もっと、輝きたい。

八月一日。

俺は背後から父さんに近づき、背中にナイフを突き刺した。父さんはよろけて床に倒れた。俺はずっと父さんを見下ろしていた。やがて父さんは息絶えた。

携帯電話を手に取り、電話をかけた。

「もしもし。警察ですか？」

ごめんよ父さん。悪意は、無かったんだけども。

もし言い訳をすればしたらそうだな、多分、いや間違いなく、俺が父さんを殺したのは、遠山紗月のせいだ。そう、紗月が悪いのだ。

俺の人生の終着点は崩れ落ちた。父さんが居る限り、俺は約束された未来に頼ってしまうだろう。安心して何もしない人間になるだろう。未来に行き詰まっても「父さんの会社に入ればいい」の一言で解決出来てしまう。

でも、父さんはもういない。だからもう大丈夫。出所したら夢を追いかける人間として人生を送る事が出来るだろう。

紗月が人生の素晴らしさ、夢を追いかける素晴らしさを教えてくれた。

ありがとう、紗月。

### 第三話 負け組 西羽 光輝

---

中学三年生になった。一年生の秋頃に入部した野球部では敬語しか使えない。例え相手が後輩でもタメ口は許されない。

「おい西羽(にしば)。ボール持ってこい」

一年生の佐藤が俺を小突いた。

「分かりました。今持ってきます」

「急げよ」

「はい」

佐藤は金属バットで俺の腰を殴った。俺が激痛に耐えかねて座り込むと、バットの先で顔面を突かれ、砂をかけられ、耳を蹴られた。

「返事してる暇があったらさっさと走れ！ 骨折るぞボケ！」

理不尽だ。

俺はグラウンドを突っ走って倉庫を目指した。

入部したタイミングが悪かったのだ。俺は中学生になってすぐいじめられた。だから野球部でもいじめられた。いじめられる前に野球部に入っていれば状況は変わっていたかもしれない。運動部に入っているというブランドと積極的な交流関係。春頃に築くべきものを俺は秋頃手に入れようとした。時既に遅しであった。

でも部活を辞める気はない。二年の頃に金を払って童貞を卒業させてくれた遠山紗月が全てだった。金さえ払えばいつでもやらせてくれる女子中学生は魅力的で貴重だった。遠山に恋をしている訳ではないけど、遠山から離れたくはなかったし、遠山に逃げたと思われたくなかった。

それに、俺は小学生の頃までは遠山とそこそこ仲が良かったのだ。また昔みたいに、まともな遠山と会話がしたい。金を払ってエッチしたくせにそんな事を思うのは矛盾してるし下衆だと思うが、性欲には勝てなかった。

グラウンドに戻り、ボールが入ったカゴを地面に置いた。ジャージ姿の遠山がカゴを蹴飛ばした。ボールが辺りに散らばる。

「拾えよ」

俺は無言でボールをカゴに入れた。遠山はまたカゴを蹴った。せっかく入れたボールが地面に散らばる。

キャプテンの北条が近づいてきた。

「おい西羽」

「はい」

「態度が生意気だ」

北条が転がっているボールを拾い上げ、俺の顔面にぶつけた。それを皮切りに他の部員たちも一斉にボールを投げつけてきた。軟球とは言え体にモロに当たれば激痛が走る。俺はうずくまり頭を抱えて、攻撃が終わるのを待った。頭に何度もボールが当たって、意識が吹っ飛ぶかと思った。

やがて攻撃が終わると、北条が言った。

「今から試合だ。お前審判な」

「分かりました」

涙と鼻水が口の中に入って気持ち悪かった。

「お前、今日授業中に寝てただろ」

「寝てました」

「つまり体力は十分にある訳だ」

「はい」



「お前さ、はいしか言えないのか？」

「体力は十分です」

北条はニヤニヤ笑っている遠山の頭を撫でた。

「安心したよ。俺、今日ストレス溜まってるんだ」

部員たちが守備位置についた。マネージャーの遠山はグラウンドの隅っこに座り込んで試合を見ている。

ピッチャーの北条がへなちょこカーブを多投してあっという間にアウトを二つ取った。そして二年生の三番打者がバッターボックスに入った。一球目。久しぶりのストレート。バッターは何故かバッターボックスの外に逃げた。キャッチャーも逃げた。何も装備していない俺の顔面にボールが直撃した。その場に倒れこんでもがき苦しむ。

大爆笑。

三番打者の山崎がバットで俺の腹を突っついた。

「西羽。痛いかな？」

「い、痛いですが……」

「どうして逃げなかった？」

「た、球が速くて……」

「あ？」

「た、たた、た……。球が速くて、逃げられませんでした」

レフトの栗山が走り寄ってきた。こいつは一年生で一番下手くそな奴だ。

「西羽！ 早く立て！ 試合ができねーだろ！」

栗山は俺の顔面を蹴飛ばした。

「いてえ！ ……や、やめてください」

「うるせーよクズ！ お前のそのぐちゃぐちゃのきたねえ顔見てるとぶっ殺したくなってくるんだよ！ 死ぬ！

死ぬよ！ キモいんだよ！」

他の部員たちも集まってきた。一年生のリーダー格の山野が提案した。

「こいつがトロいせいで試合出来なくなった。これは罰を与えるべきだ。北条先輩、どう思いますか？」

「賛成だ。こいつには躰をする必要がある。西羽、立て」

鼻の辺りを触ると、手が血で汚れた。感覚は無かった。

俺は無理矢理立たされ、倉庫にぶち込まれた。扉が閉められる。

突き飛ばされ、俺は暗闇の中で二十三人の部員たちを見つめた。三年生が八人、二年生が七人、一年生が七人、いつの間にかちゃっかり倉庫の中に入ってきている遠山紗月。二十三人が敵で、味方はいなかった。

栗山が俺の顔面に唾を吐いた。

「脱げよ」

北条が腕を組みながら頷いた。

「そうだ。脱げ」

「いやーもうめっちゃ恥ずかしー！」

遠山が体をくねらせながら甲高い声をあげた。俺はユニフォームを脱いでパンツだけの姿になった。

一年生軍団が「脱げ脱げー」と騒いだ。二年生と三年生は無表情で俺を見ている。

遠山が一步進み出た。

「私が脱がしてあげる」

遠山が俺の前に座り込み、パンツを脱がせ始めた。

「もう西羽君赤ちゃんみたーい。きもーい。死んでほしーい」

遠山はパンツを脱がせると、靴でめちやくちやに踏みつけた。もうこのパンツは履けないだろう。

俺が裸になっても騒ぐのは一年生たちだけで、二年生と三年生はニヤニヤ笑っているだけだった。北条がわざわざらしく咳払いをして、言った。

「一人ずつ唾をかけろ。西羽、お前は唾をかけられたら「ありがとうございます」って礼を言うんだ。分かったな？ お前は今日体力あるんだろ？ だから耐えられるよな。ん？」

意味不明な理屈だった。全員が「イエーイ！」と叫んだ。

先頭バッターの一年生が勢い良く俺の腹に唾をかけた。

「ありがとうございます」

二番バッターは俺の顔。三番バッターは俺の股間。四番バッターは目、五番バッターは足。体の至る所が唾だらけになった。六番バッターの遠山は一味違った。

「西羽の……。バカヤロー！」

と叫んでまず頭。

「買春野郎！」

鼻に直撃。その後も目、足、腕、背中、首、数えきれないくらいに唾をかけられた。

「喉カラカラになっちゃった。北条君、水分補給させてー」

遠山が笑顔でそう言うと、北条は遠山を抱きしめて唇にキスをした。遠山はトロンとした表情で強く北条を抱き返した。俺はこの時やっと涙を流した。

タダでキス出来るなんて。やっぱり俺は、皆と違う世界で生きている。

パンツは諦めて、ユニフォームだけ着て家に帰った。時刻は午後六時半。空腹で倒れそうだった。

台所に行くとも食事の準備が進んでいた。米、味噌汁、サンマ、枝豆。

母親は麦茶の入ったグラスをテーブルに置きながら言った。

「あら、お帰り」

俺は食卓テーブルに並んでる食器を全て手で薙ぎ払った。食器が床に落ちて皿は木っ端微塵に割れた。

「ふざけんなよクソババア！ なんだよこの晩飯は！？ 朝飯か？ 刑務所の飯か？ いや刑務所の飯以下だね！ なんてお腹空かして帰ってきてこんなブタのエサみて一な飯食わなきゃいけねーんだよ！ ていうかどう考えても量がすくねーんだよ量が！ おめーみてえなクソババアはもう胃袋枯れてるからこんな飯でも十分に足りるかもしれねーけどよ、俺は十五歳なんだよ十五歳！ こんな飯じゃ足りねーんだよ！ 喧嘩売ってんのか？

あ？ なんか言ってみろよボケ！ ああ分かっているよこういう事を言うと主婦は忙しいのよとか言うんだろじゃあ主婦の仕事ってなんだよ！ 飯まともに作らない主婦なんかニートと大して変わらねーだろ！ 主婦の忙しいアピールほどうざいものはねーんだよ！ こんな飯食えるか！ 仕事サボってんじゃねーよぶっ殺すぞ！」

母親は泣きそうな顔で割れた皿の残骸をかき集め始めた。

「ご、ごめんね。お金、あるから。何か買ってきていいよ」

俺はリビングへ行き、テーブルに置いてある財布から千円札を抜き取った。そしてジャージに着替えて外へ出た。

コンビニの前に行くと、同じクラスの佐伯可奈子が灰皿の横に座り込んでタバコを吸っていた。上は黒色のカットソー。下は白色のフリルのスカートを着ていた。外は真っ暗だったけど、ひと目見てすぐに佐伯だと分かった。

ボブカット。童顔。大きな目。幼く可愛らしい印象があるが、実際は教師嫌いでガラが悪くて口も悪くて遅刻サボりの常習犯で、香連中学ナンバーワンの問題児だった。でも性格は悪くなく、友達思いの良い奴だというのが俺の持っている印象だ。

「あれ、お前……。西羽だっけ。隣のクラスの」

「あ、どうも。えっと、こんにちは」

佐伯と話すのは始めてだった。もちろん存在は知っていたけど、佐伯可奈子みたいな可愛くて皆のリーダー的な人間とは無縁なのだ。

佐伯はタバコを一口吸い、しかめっ面で俺を睨んできた。スカートの中のパンツは丸見えだった。

「おい」

「なんですか」

「なんでお前、敬語なの」

「いえ、その……」

癖になってるんです。

「タメ口使えよ。ほら、隣座れ」

俺は言われるがままに隣に座った。

「吸う？」

「……吸ったことない」

佐伯はまたタバコを一口吸い、地面に置いていた缶コーヒーを一口飲んだ。

「アンタが皆に好きなようにされてる所、よく見かける」

いじめという表現を使わない所に、佐伯の優しさを感じた。俺は大きく頷いた。

「一つ質問がある」

「なに？」

「なんで部活辞めないの？ アンタさ、クラスでも部活でもやられてるんでしょ？ クラスでの生活は辞められないけど、部活は辞められるじゃん」

「……」

「教えてよ。なんで辞めないの」

「遠山が気になる」

誰にも言った事のない本音をあっさり言ってしまったが、驚きはなかった。

「紗月とやったの？」

「うん」

「紗月の事好きなの？」

「そうなのかもしれない」

「違うね」

「え？」

「紗月の事が好きだから部活に残ってるんじゃないかと、悔しいから残ってるんじゃないの？ 違う？」

俺が部活を辞めないのは悔しいから。そして、最後の意地だから。それは多分、当たってる。

佐伯はタバコを地面に捨てて靴で押しつぶした。

「で、アンタここに何しに来たの？」

「え……。飯、買いに来た」

「お母さんご飯作ってくれないの？」

「……」

佐伯は鼻で笑った。

「一応、紗月とは幼稚園からの友達なんだ。昔はあんな病的な人間じゃなかった」

「うん」

「だからさ、私がちよっくら叩きのめしてやるよ。紗月の事」

「……は？」

佐伯は立ち上がって大きく伸びをした。

「久しぶりに面白くなってきたぞー！」

コンビニで焼き肉弁当とジュースを買って家に帰った。食卓テーブルにはケンタッキーの箱が置いてあった。母親は椅子に座ってニコニコ笑っていた。

「ケンタッキー買ってきたよ。好きでしょ、ケンタッキー」

久しぶりに訪れた最高潮の幸福感が一気に破壊された。水を差されたってもんじゃない。

俺はケンタッキーの箱をゴミ箱に放り込んだ。

「そういう問題じゃねーんだよ！ これじゃまるで俺が好き嫌いしてるみたいじゃねーか！ 俺はな、お前がなあ！ 手抜きしてる事にキレてるんだよ！ なんで飯まともに作らねーんだよ！ それにアイロンがけだってやらねー！ パートにも出ず毎日ワイドショーばっか見てよー！ なんなんだよお前は！ いや自覚があればいいんだよ自覚があれば。でもお前は自分がニートだっていう自覚がねーんだよ！ 何もしてない！ 何もやらない！ 全てが手抜き！ なのに事あるごとに主婦は忙しいのよとかたまには休みがほしいのよとか言い出すのが死ぬほどうぜーんだよ！」

我慢できず、俺は母親が座っている椅子を蹴飛ばした。

「死ねよー！ クソババア！ 死ね！ 死ね！ 死ね！ 気持ち悪いんだよ！ さっさと死んじまえー！ 失せろ！ 地獄に落ちろ！ 頭から道路に突っ込んで死んじまえ！」

母親は泣いていた。

翌日の朝。俺は教室でいつものように自分の席に座っていた。朝のホームルームが待ち遠しい。なるべく先生に早く来てほしかった。ホームルームが遅れれば遅れるほど、攻撃の時間が長くなる。

「なあ西羽」

クラスで一番目立っている木村が話しかけてきた。木村の横にはクラスで一番性格が悪い後藤が立っている。

「お前の顔見てるとき、ムカつくんだよな」

木村はそう言って、俺の頬を拳で殴りつけてきた。続いて後藤も同じ所を殴ってきた。俺は何も言えず、ただ黙っていた。

クラスの皆が俺を見ていた。男子はクスクス笑い、女子は「やだー」とか「いたそーう」とか言いつつも顔に感情はない。

「あーなんかやってるー」

遠山の声が聞こえた。ドアの方を向くと、楽しそうに笑っている遠山がいた。笑顔を崩さず教室の中に入ってくる。そして俺の前に立つと、人差し指で俺のおでこを突つき、髪の毛を思い切り引っ張ってきた。

「あははっ。痛い？ ねえ痛い？ 痛いよね？ あはっ。おもしろーい」

「おいさつきー。オモチャ独り占めすんなよー」

木村が俺の体を蹴飛ばした。床に崩れ落ちた。遠山に頭を踏みつけられた。

後藤が手を叩いて笑う。

「もっとやっちまえよー！ 殺せ殺せー！」

クラスはざわついていた。そのざわめきに気づいた他のクラスの連中が廊下から様子を見ていた。野次馬たちの目は好奇心でギラついていた。心底楽しそうだった。

立ち上がろうとしたが、後藤に背中を踏みつけられて俺は毛虫のように蠢くしかなかった。誰かが近づいてくる。視界にローファーが入り込んできた。背中痛みが消えた。顔を上げると、目の前に佐伯可奈子が立っていた。

俺はのろのろと立ち上がった。俺の前に佐伯が立ちはだかり、遠山、木村、後藤の三人を睨みつけている。

やめてくれと叫びたかった。そういえば中二の頃、佐伯にかばってもらってる男を見た事がある。あれは惨めな光景だった。見ていて辛かった。それにあの男は父親を殺して逮捕された。あんな奴と同じシチュエーションを味わいたくない。

佐伯が遠山のむなぐらを掴んだ。

「紗月」

「なに？」

「目覚ませ」

「は？」

佐伯は遠山の腹に右ストレートをぶちこんだ。野次馬たちは歓喜の声をあげた。俺の全てが終わった瞬間だった。

遠山がよろめく。すかさず佐伯の膝が遠山の顎に直撃。間髪入れず顔面に拳を叩き込み、髪の毛を掴んで顔面を机に叩きつけた。鮮やかにノックダウン。

木村と後藤が佐伯に襲いかかろうとしたが、佐伯が木村の顔に唾を吐き、後藤の鼻に頭突きを食らわせた。ひるんだ木村と後藤に向かって、佐伯は椅子を幾つもぶん投げた。二人はあっという間に床に倒れ、沈黙した。しかし佐伯は暴走をやめない。既にKOされている遠山を床に押し倒し、めちゃくちゃに顔面を殴った。

やっと先生がやってきた。佐伯達は教室の外に連れて行かれた。教室の中央に立ち尽くした俺はクラス全員の視線を浴びていた。誰かがボソリと呟いた。

「女の子に助けてもらってやんの。だっせえ」

また誰かが言った。

「しかも見てるだけ。なさけねーな」

俺は泣いた。大声で、泣き叫んだ。もうどうでもよかった。

家に帰り、まっすぐ自分の部屋に入った。そして呆然とした。テーブルの上にゲームのコントローラーの箱が置いてあった。

なんだこれは。俺は急いでリビングへ行ったら、母親はソファに座ってワイドショーを見ていた。

「あのコントローラー、なに」

「この前ゲームのコントローラー壊れたって言ってたでしょ。だからね、買ってきてあげたんだよ」

全身がカッと熱くなった。

「ふざけんじゃねーよクソ野郎！」

思いつく限りに暴れた。テーブルをひっくり返し、ソファをなぎ倒し、テレビを壁に放り投げ、台所の食器棚の扉を開け、目に入った食器を次々に床に投げつけた。壁に飾ってある額縁を自分の頭に叩きつけ、炊飯器を叩きつけて破壊し、ポットを両手で持って窓をがち割り、パソコンの画面に拳を叩き込み、和室に飛び込んでばあちゃんが入っている仏壇の扉を蹴飛ばして穴を開け、玄関に行ってタンクに入っている石油をまき散らし、冷蔵庫に駆け込んで扉を開き中に入っている物をゴミ箱に突っ込みゴミ箱を蹴り飛ばし、階段を駆け上がって自分の部屋に行きパソコンを窓から投げ、ノートパソコンを踏み潰し、小学校の時に遠山にもらった未使用の鉛筆を半分に割り、壁に頭を何度も叩きつけ、ずっと集めてた野球カードを破り、ボールペンで腕を引っかき、拳で何度も頬を殴り、こめかみを殴り、何度も殴って、そこで母親に止められた。俺はベッドの中に入っていつまでも泣き続けた。

翌日の朝。起きてリビングに行くと、母親が天井からぶら下がっていた。見た瞬間死んでいると分かった。色々な液体が床に染み渡っていた。臭かった。俺は自分の部屋に戻り時間割を確認して教科書とノートをかばんに

入れて学校へ行った。

校門に佐伯可奈子が立っていた。俺に気づくと彼女はこちらに歩み寄ってきた。

「ごめん。やりすぎた」

「ん」

「アンタの事考えてなかった」

「ん」

「紗月に我慢出来なかった」

どうしていいか分からなかった。出来ることなら、ありがとうと言いたかった。佐伯には感謝してる。でも、皆が、俺に感謝をさせてくれないんだ。

教室に行っても遠山は居なかった。無性に腹が立ったから帰った。そして遠山の家に行った。

ドアは開いていたから勝手に中に入った。二階に上がり遠山の部屋のドアを開けた。遠山はベッドで漫画を読んでいた。

「お邪魔します」

「……何してんの？」

「話がある」

遠山は起き上がって俺をじっと見つめた。

「なに？」

「付き合ってくれ」

「無理」

「どうして」

「いじめられっ子と付き合うなんて、ありえない」

「そういうもんか」

「漫画では自分を好きな女の子が助けてくれるけどね」

「現実はどうじゃない」

「アンタ、わざわざいじめられてる奴と付き合いたいと思う？ 惨めにリンチされてる奴の事好きになれる？」

「俺も一度でいいからいじめる立場になりたかった」

そして皆と一緒に楽しみを分かち合いたかった。一体感を共有したかった。

「小学生の頃までは、アンタの事嫌いじゃなかったよ。もちろん好きでもないけど」

「俺が嫌われたのは俺のせいかな」

「そういう事。いじめられっ子は嫌い。キモいから」

「遠山」

「ん」

「母親が死んだ」

「あら」

「母親が死んだのも俺のせいかな」

「いや、知らないけど」

「俺のせいだろう。遠山、明日は学校に来るのか」

「多分」

「また皆と楽しく生きてくのか」

「あの三人が邪魔だけどね」

「あいつらは俺を助けてくれた」

「でも可奈子、先生にめっちゃ怒られてたよ」

「じゃあ佐伯が怒られたのも俺のせいか」

「うん」

「どうして俺はいじめられるようになったんだ？」

「なんか弱そうだし、おどおどしてるし、ブサイクだから」

体が痙攣を起こしそうだった。

「俺がいじめられっ子になったのは俺のせい。母親が死んだのも俺のせい。遠山に嫌われたのも俺のせい。佐伯が怒られたのも俺のせい。全部俺のせい。遠山は何も悪くない。俺をいじめた奴らも悪くない」

「うん」

「俺をいじめてきた奴らも遠山も、この先楽しく生きていく。大人になって丸くなって、何事も無かったかのよう  
に学校で勉強して友達と思いで作って、立派に就職して、それなりに恋をして結婚して子どもを作って、良い  
両親になろうと努力する」

「全員がそういう人生を送る訳じゃないとは思うけど。大多数の人間はそうでしょうね」

「俺は？」

「え？」

「俺はどうすればいい？」

「知らねえよ」

「遠山」

「あ？」

「そういうもんか」

「そうだよ」

「分かった。もういい」

俺は線路に身を投げた。電車が近づいてくる。皆、迷惑かけっぱなしでごめんなさい。

## インターミッション レイプおばさん 佐伯 可奈子

藤田さんのアパートに遊びに行った。喘ぎ声が聞こえた。音を立てないように玄関で靴を脱ぎ、リビングのドアを少しだけ開けて、隙間から中を覗いてみた。

中学生くらいの男女が素っ裸でエッチしていた。女は泣き叫んでいた。男は泣きながら女の上に覆いかぶさって腰を動かしていた。藤田さんはドアに背を向けて座り、包丁を持っていた。

藤田さんが言った。

「紗月という女の子が居てね」

私は声が出そうになるのを必死に堪えた。

「小学生の頃からうちのコンビニの常連でね、凄く可愛い子だった。今は一体、どこで何してるんだろうかねえ。もうコンビニにも、遊びに来てくれないし」

藤田さんはけらけらと笑った。

「なあ。五十五歳で処女って、どう思う？」

二人は何も答えなかった。藤田さんが続ける。

「私がどういう人生を送ってきたのか、分かるだろう？」

頭がイカれてんのか？ 男は腰を動かしながら必死に何か考えている様子だったけど、結局口から漏れるのは喘ぎ声だけだった。藤田さんはまた笑った。

「人それぞれ自分の人生に対して思う所は色々あるだろうけどね、難しい言葉を使ったり、いちいち哲学的な解釈を自分に与える必要はない。答えは簡単よ。面白くない人生を送ってきたのさ」

男が腰の動きを止めると藤田さんは怒鳴った。「動け！ 動いて種付けしろ！」

そしてまた淡々と語り始める。

「私はね、嫌なんだ。若い子達が次々に処女捨てて童貞捨てていくのが。だって惨めでしょ。五十五歳の人生のベテランがさ、ガキに負けてるみたいでさ。で、思うのよ。私の知らない所で皆がどんどん大人になって、人生の楽しみを知っていくくらいなら」

藤田さんが指で包丁を撫でる。

「私が知っている子同士で、私が見ている目の前で、恵まれない初体験をしてほしいなあってね。それなら少しは、納得できる」

女の子がドアに視線を向け、首を振った。私は逃げた。

藤田さんは私がよく行くコンビニの店長だった。背は小さく髪は薄くて短く、客に対しての愛想は良いが、若い店員に対しての態度は高圧的でいつも怒っていた。

レジの打ち間違えをした店員をなじる、お釣りを返し間違えた店員にキレる、何かトラブルが起きた時、すぐ高校生の店員のせいにして口論になる。お菓子をゴッソリ盗まれた事が発覚してまた罵倒する。何かあった時藤田さんくらいに怒れる人じゃないと、店長は務まらないし店はバイトの遊び場になってしまうだろうとは思うけど、何故そんなに毎日イライラしていて、すぐキレるのか疑問だった。

藤田さんは私に良くしてくれていた。若い人が嫌いという事ではないらしい。いつもサンドイッチやおにぎりを買うと、「たまにはまともなご飯を食べなさい」と怒られた。

ある日の事。学校からの帰り道に雨が降った。急いで帰っていた。藤田さんとすれ違った。あらあらそんなに濡れて。私の家に来る？ 本当は家に帰りたくなかった私は藤田さんのアパートに行った。

そう家に帰りたくない。それだけの理由で、良く知らない人の家に行ったのだ。お菓子なんてもらわなくても、それなりの理由さえあれば、人は他人に付いていく。お菓子に誘われて知らない人に付いていく子どもの方が



、まだ平和的だ。

藤田さんの部屋は質素だった。

六畳のリビング。四畳の寝室。玄関の側に小さな台所、お風呂、トイレ。窓は建て付けが悪くてなかなか開かなかった。

藤田さんは窓を開けようとして悪戦苦闘していた。私が代わりに開けてあげた。藤田さんは笑いながら言った。

「これでドアも壊れたら、閉じ込められちゃうねえ」

家具は最小限しかなかった。小さな液晶テレビが床に置いてあるけど、DVDプレイヤーどころかビデオデッキすらなかった。娯楽といえる物はほとんど無かった。せいぜい週刊誌が何冊かテーブルに置いてあるだけだ。

私は悲しくなった。藤田さんはパートが終わると、スーパーで一人分の食料を買い、この誰もいない質素なアパートに帰ってくる。そして小さな台所でご飯を作り、やっぱり小さなテーブルに皿を並べ、座り、テレビでも見ながらもそもそご飯を食べる。その後は風呂に入り、テレビを見て、寝る。

寂しいだろうなって思った。それに五十代と思われる藤田さんが一人暮らしをしている事も哀愁漂っていた。処女らしいからもちろん未婚だろう。もしかしたら付き合った事すら無いのかもしれない。ていうか一緒に暮らししてくれる親戚は居ないのか？

藤田さんの手作り料理はあんまり美味しくなかった。魚とか煮物とか、なんか湿ったらしくて迫力に欠けるものばかりだし、味付けも薄い。食った気がしない。量も少なかった。

この前夜中にコンビニに行った時、若い二人のアルバイトが藤田さんの悪口を言っていた。すぐキレる。しょうもない事でいちいち店に電話してくる。なんでも人のせいにする。意味不明な事で騒ぎ、やっぱりキレる。更年期のヒステリークソババア。そんな藤田さんは一人で寂しくアパートに暮らし、ジメジメした飯を食っている。

私が料理を食べ終わると、ずっとそわそわしていた藤田さんは突然古い電話機の手話器を取り、どこかに電話をかけた。ちなみに藤田さんは携帯電話を持っていない。

どうして携帯電話を持たないのかと聞いた時、藤田さんはシンプルな理由を教えてくれた。

「人間は食べないと死ぬから食費は必須だし、家賃も光熱費も払わなきゃいけない。それにこんな老いぼれいつ病気でぶっ倒れるか分からないし、あと何年働けるかも分からない。だからなるべく無駄を削って節約しなきゃいけないの。で、無駄な出費といったら携帯電話とか、ビデオとかでしょ？」

という事で、藤田さんは携帯電話を持っていない。でも電話の鬼だった。

「どこに電話かけてるの？」

「お店よ」

どうしたんだろう。家から直接店に電話かけるなんて。よく分からないけど只事ではない。

「あ、佐藤君？ アンタ来週からシフト変わるんだけど覚えてる？」

さっき聞いとけ。

「あーあとほら、週刊誌ちゃんと抜いといてよ。この前マガジン入れようとしたらね、先週のマガジンまだ置いてあったわよ。ほんとしっかりしてよー。分かってる？」

その後適当に説教したり店内の様子を聞いて、藤田さんは電話を切った。

すげえ。本当にしょうもない事で店に電話するんだ。

でも私は納得していた。

パートしかする事ないからお店の事が人一倍心配で、何より、そう、藤田さんは、寂しいんだ。

翌日。佐伯家の晩御飯は米、味噌汁、魚、唐揚げだった。どっちかという朝ごはんみたいだった。

父親は去年から引き続き失職中。毎日ぼんやりパソコンの画面を眺めて一日を終えている。母親はパートに明け暮れている。まともな飯を作る余裕なんて無い。佐伯家は貯金と失業手当と母親のパート代でなんとかになっていた。でも高校に行くとなると学費はまだ必要になる。なんとかしないとイケなかった。

晩飯を食った後、父親はいそいそと自分の部屋に引き下がった。追いかけて部屋のドアを開ける。いつものように床に寝転がり、ノートパソコンをいじっていた。パソコンの横にはコンビニ弁当が置いてあった。

……そんな金、どこから出てきた？

私は嫌な予感がして自分の部屋に駆け込んだ。そして唾然とした。

コンボが、無い。

お祖母ちゃんにコンボを買ってもらった時の事を思い出した。小学生の頃、私はお母さんにワガママを言っていた。コンボ欲しいコンボ欲しい。お母さんがそれをお祖母ちゃんに愚痴った。お祖母ちゃんが家にやってきた。可奈子、一緒にお出かけしよう。家電量販店に連れて行かれて、お祖母ちゃんが言った。

「どれがいい？ お祖母ちゃん機械はよく分からなくてねえ。好きなの選んでいいよ」

私は顔が真っ赤になった。ワガママを受け入れてもらった事が死ぬほど恥ずかしかった。自分がクソガキにしただけ思えなかった。高いお金を払わせる事になってしまってなんだか惨めだった。でもここまで来たら後には引けず、中国のメーカーが作った一番安いコンボを選んだ。

腸が煮えくり返った。父親の部屋に行き、叫んだ。

「お前コンボ売つただろ！？ ぶっ殺されて一のか！？」

父親は振り返り、笑った。

「これ、一度食ってみたかったんだ。六百八十円の焼き肉弁当。母ちゃんのクソまずい飯なんか、食えねえよ」

私は窓を開けた。ノートパソコンを奪い取った。窓から投げた。父親は怒り狂い、私の顔面を何度も殴った。負けじと顔面を引っ掻いたが、張り倒され腕を捕まれ、思い切り捻られた。骨が折れると思った瞬間、母親が助けに来てくれた。父親はリビングへ降りていった。お母さんは泣きながら言った。

「コンボ、お金溜まったら買ってあげるからね」

そういう問題じゃない。私は言った。

「あいつ殺してバラバラにして、臓器売って、うまい飯食おう」

もうあんな父親が居る家に居たくない。私はふらふらと家を出て、ふらふらと藤田さんのアパートに行った。誰かに家庭の愚痴を聞いてほしかった。友達ではない、大人に。

そして、最悪の場面に遭遇した。

自分が気に入った子ども達にエッチさせるお婆ちゃん。もしかしたら私も、包丁で脅されて知りもしない男子中学生とのエッチを強要されて処女を奪われていたかもしれない。いや、今はそんな事はどうでもいい。

紗月。

あいつが頭おかしくなったのは……。

藤田さんのせいだ。絶対、そうに決まっている。

## 第四話 ブルドッグ女 藤ヶ崎 亜由奈

病院を抜けだして学校へ行く途中、すれ違った美人が私の顔を見て悲鳴をあげた。だから美人の顔面に噛み付いた。女は悲鳴をあげ、暴れ狂った。私は両手で女の顔を掴み、歯に力を入れた。

肉を引きちぎってやる。

骨を砕いてやる。

顔の原型ぶっ壊してやる。

頬に歯を食い込ませ、無我夢中で肉を食おうとした。美人を食ってやる。壊してやる。私は悪くない。悪いのはお前だ。美人に産まれたお前が悪い。

美人は私の腹を蹴り、逃げていった。私は学校へ向けてまた歩き出した。

高校一年生の春。思い切ってアルバイトの面接に行った。職種はお好み焼き屋のホール。バイトにしては珍しく集団面接だった。全部で四人。私と見知らぬ男子高校生二人。そして同じクラスの遠山紗月。

遠山はぷりっぷりのミニスカートを履いていた。彼女はそこそこ可愛かった。声は綺麗で透き通っていた。笑顔が似合っていた。長い黒髪はサラサラだった。愛嬌もあった。

遠山は採用された。遠山の太ももをチラ見してた男子二人の合否は知らない。私は案の定落ちた。

なんだよ。遠山って援交してんだろ。バイトなんかする必要ないじゃん。そんなにお金が必要なの？

遠山は教室で騒いでいた。バイトに受かった。お小遣い稼げる！ 受かるとは思わなかった！ マジ嬉しい！私の方を見ながらずっとそんなような事を言っていた。クラスの皆はクスクス笑っていた。リーダー格の男子、村山はわざわざ私の席までやって来てこんな事を言った。

「お前も一緒に受けたんだって？ ブスのくせにホールの面接？ アホか。お前は顔だけじゃなくて脳みそも腐ってるんだな」

その後もなんか色々言われたけど、幼稚な事しか言ってなかった。でも幼稚な暴言にすら言い返せない事が、悲しかった。

放課後。行きつけのカフェでコーヒーを飲んだ。滅多に来ないけど自分を慰めるために奮発した。後ろに座っていた男二人組みの会話が聞こえてきた。

「いやあ店長。やっと可愛い子雇ってくれましたね」

「んー。まあ、そうだなあ」

「うちのホールってブスばかりでしょ？ やっぱりね、ホールは可愛い子に限りますよ。店長、客観的に考えてみてくださいよ。お好み焼き選ぶでしょ。店員呼ぶでしょ。そこでお好み焼きみたいにぐちゃぐちゃな顔したブスな女が出てきたらどうです？ 食欲無くなるでしょ」

「俺は、気にしないけどなあ」

「いやでもね、ホールにしる受付嬢にしる、そりゃどうせならブスよりも可愛い女の子の方がいいでしょ？ 少なくとも、うちみたいにホールが全員ブスってのはさすがに問題アリですよ。店の印象が悪くなる」

「そうかなあ」

「そうですよ。それにね店長、働いてるスタッフの士気にも関わります。ブスって見てるだけでテンション下がるんですよ。だから俺達スタッフはね、キレちゃったんです。可愛い新人スタッフの採用を店長に求めた事はごく自然な成り行きです。ねえ、考えてみてくださいよ。可愛い女性従業員が何人か居れば、それだけでバイトが楽しくなる。バイトに行くのが面倒くさくても、あの子の可愛い笑顔を見るために頑張ってバイトに行こうって気になる。可愛い女は男の栄養剤。生きるための必需品。ブス女は盲腸。犯罪者だ」

「でもなあ。俺は本当は、あの、藤ヶ崎……。藤ヶ崎亜由奈ちゃんだっけ？ あの子を雇いたかったんだけどなあ」

「は？ あのブスですか？ 勘弁してくださいよ。履歴書の写真見ましたよ。ブルドッグじゃないですか」

「いや、でも。スタッフが可愛い子雇え雇えと言わなければ、俺は藤ヶ崎さんを採用したんだけどなあ」

「どうして？」

「なんていうかなあ。喋り方がハキハキしてたし、笑顔が自然だったし、なんかこう……。嘘が無い子だなと思ったんだよ。自分の思ってる事を素直に言える。意識しなくてもハキハキ喋れる。挨拶もきちんとしてたし、それにほら、椅子をちゃんと整えてから部屋を出たのは藤ヶ崎さんだけだった。ドアを閉める前も、笑顔でありがとうございましたって言ってくれたし。感じの良い子だった」

「紗月ちゃんは？」

「確かに可愛くて愛嬌のある子だけど、なんか嘘っぽいついていうかなあ。何もかも作ってるのが手に取るように分かるっていうか、今どきの子っていうか、ケロリとした顔ですぐにバイト辞めそうな、そんな感じの子なんだよなあ」

「ふーん。でもまあ、可愛い女子高生が入ってきてくれてスタッフは大喜び。お客さんだって喜んでくれるはずですよ。いやあ店長。紗月ちゃんがビッチである事を祈ってますよ、もしビッチなら女子高生とエッチするっていう願望が叶います」

「お前をクビにして、藤ヶ崎さんを採用しようかなあ」

「ははっ。やれるもんならやってみてくださいよ。社長と俺の苗字、教えてあげましょうか？」

私はカフェからこっそり立ち去り、コンビニで菓子パンを買い漁って道端で貪り食った。足りなかったからまたコンビニに駆け込んで二百六十円のチョコレートプリンを買った。あんまり美味しくなかった。

ブスの人生は難易度が高い。でもあの店長のように内面をしっかりと見てくれる人もいる。私は人間が大嫌いで大抵の人間は気に食わないし出会った人間のほとんどは何かしら理由つけて嫌いになるけど、それでも自分が思っている以上に良い人間ってのは存在する。それは忘れちゃいけない。

心を強く持て。またバイトの面接を受けるのだ。私はお金がほしい。沢山コスメを買ってファッション雑誌を買って努力するのだ。私は諦めたくない。努力をしたい。ブスの運命に抗いたいのだ。

顔は関係ない。努力しない人間に価値はあるのか？ ある訳ない。

一ヶ月、面接に落ち続けた。十三打数無安打。でも大丈夫。プロ野球選手だってそれくらいヒットが出来ない時は普通にある。挫けちゃいけない。そう思ってコンビニの面接を受けてやっと受かった。しかも面接の場で採用が決まった。どうやら突然店員が二人辞めてしまい、じっくり人を選んでいる時間なんて無かったらしい。来た奴を取れ。猫の手も借りたい。そんな状況に運良く滑り込んだ。

私は狂喜乱舞した。でも幸福はすぐにぶっ壊れた。勤務初日。職場に出向くとそこには遠山紗月がいた。なんの冗談？

「藤ヶ崎さんここ受かったんだね。よろしくー」

「アンタお好み焼き屋のバイトやってたんじゃねーの？ 辞めたの？」

「あの、遠山さん。なんでここに……？」

「前のバイト辞めたんだ」

「……なんで？」

「あちーんだよ。熱気が凄い。やってらんない」

遠山はビッチでいじめっ子で胸くそ悪い奴だった。遠山に本格的にいじめられた事はないけど、よく悪口や陰口を言われていた。消しカスやボールペンを頭に投げられた回数は数え切れない。そのくせ普段は普通に話しかけてくる。劣悪な態度と平和的な態度を繰り返しぶつけてくる奴ほど胸くそ悪い奴はいない。遊んでいるのだ。完全に。

私は遠山を恐れていた。でもさすがに職場でいじめてくる事はなかった。仕事は普通に教えてくれるし、私が失敗しても大して怒らない。

ある日遠山に職場仲間たちとの飲み会に誘われた。私と遠山と三人の男子高校生。全員同い年。

遠山はそこそこ可愛かった。私は激烈にブスだった。三人の男はそこそこイケメンだった。最悪だった。私はオモチャとして参加するのだ。

でもいじけてちゃいけない。ブスだからってひがみ、男と仲良くなるチャンスから逃げていては永遠に処女のブスだ。内面を見てくれる人だってちゃんという。だから私は勇気を出して飲み会に挑んだ。

近所の居酒屋に行った。遠山も男子も酒をぐびぐび飲んでいて。男共は遠山ばかり見て、話しかけていた。ニタついていた。私が頑張って喋っても無視された。

飲み会終了後、外に出た途端に男共の雰囲気が変わった。ソワソワして、歩くのが遅くて、なかなか帰ろうとしない。そして意を決したように三人の中で一番イケメンな奴が言った。

「なあ。俺ん家で遊ばね？」

遠山は快く承諾した。四人は颯爽と歩き出す。私はどうして良いのか分からなかった。

私が立ち止まっていると、遠山が振り返った。

「どうしたの？ 早く来なよ」

男共はため息をついた。勘弁してくれ。そういう顔してた。

男の部屋に入るのは始めてだった。汚い部屋だった。四人は輪になってお喋りを始めた。私は部屋の隅に座っていた。喋ろうとしても男共がわざとらしく大きな声を出して食い止めてくる。

遠山はずっと余裕ぶった顔をしていた。やがてソワソワを我慢出来なくなった男の一人が私に声をかけた。

「あのさ、藤ヶ崎」

高校生になって始めて普通に男子に話しかけられた。私は嬉しくて、自分がニヤけているのが分かった。この非現実的な出来事で私は失神しそうだった。

男は財布からお金を取り出した。そして、言った。

「コンドーム。三つ買ってきて」

「え」

「買ってこい」

私は近くのコンビニでコンドームを三つ買った。女子高生らしき店員はバカにしたような笑みを浮かべていた。

もしかしたら私も参加させてもらえるかも。男って穴があればそれで良いんでしょ？ そんな期待を抱きながらアパートに戻った。

部屋に入った。四人はもう始めていた。私はコンドームをテーブルに置いた。

裸の紗月は這いつくばりながらテーブルににじり寄り、コンドームを手を取った。そして笑顔で言った。

「穴は一つで十分よ」

性の乱れがどうか道徳的にどうだとか、そういう問題じゃない。ブスに産まれたせいでモテず、同じくブスで地味な友達しか出来ず、クラスメイトにからかわれ、バイトの面接も落ちまくり、やっと受かったバイト先でこの仕打ち。かと思えば、すぐそこで男を手球に取り彼氏を取っ替え引っ替えして、挙句の果てには大して知りもしない男達と乱交なんかして楽しんでいる女子高生がいる事が問題なのだ。

おかしくね？ おかしいよね？

まあいいや。慣れてる。ここでヤケになって犯罪でも犯したら外面だけでなく内面もブスになってしまう。せ

めて内面だけでも美人にしておかなければ。

夏休み直前。私は焦っていた。予定が無い。それは嫌だった。私だってデートしてみたい。

だから私は六月頃から急に気になり始めたクラスメイトに告白する事にした。

佐藤和則君。不良とも地味系の人間とも仲良く出来るような人だった。誰とでも満面なく仲良くしている所に私は惚れた。大人っぽい所も良かった。

佐藤君は放課後たまに駄菓子屋でお菓子の買い食いをしている。そういう所も可愛い。私は駄菓子屋の前でお菓子を食べている佐藤君に話しかけた。

「あの」

「なに？」

佐藤君は無表情で私をじっと見つめた。

「ちょっと」

私が駄菓子屋の横に佐藤君を連れて行った。緊張して死にそうだった。でも言わなきゃ。勇気を出さないと人生は始まらない。ブスはブスだよ。でもひねくれて殻に閉じこもってる奴はもっとブスだ。

「あの、好きです。だから、その、私と、付き合ってください」

「……」

「……」

佐藤君は一步、私に近づいた。心臓が飛び出るかと思った。そして右手で私の顔を鷲掴みにしてきた。

「なに告ってんだよ。お前はキチガイか？ なあ、今の俺の気持ち分かるか？ ブスに告られたんだよ、ブスに。しかも飛び切りのブスに。なんの罰ゲームだよ。人生の汚点だよ。そのきたねえ顔ぐっちゃぐちゃにしてやりてえよ」

佐藤君は手に力を込めた。痛い。手を振り払おうとしても怖くて動けなかった。頬が歪み、唇がアヒルのようになっている事は簡単に予想出来た。これ以上ひどい顔にしないでくれ。

「あのさ」

「ふあ、ふあに……？」

「なんでせつかく生まれてきたのにさ、おめーみてえなブスと付き合わなきゃいけないの？」

「ひ、ひふおい……」

「ひどい？ バカかお前は？ よし分かった。顔も脳みそもイカれてるお前に一つ教えてやる。ブスに人権は無んだよ」

「は……？」

「ブスな受付嬢が居るか？ コンビニだって可愛い女子高生が圧倒的に多いだろ？ 理由は分かるだろう？ 面接官が顔で選んでるからだよ。ブスは美人に勝てない。男も仕事も何もかも勝ち取れない。男は、みんな、美人が好きなんだよ！ ブスが嫌いなんだよ！」

佐藤君は私の顔から手を離した。

「ブスはおとなしく生きてろって事だ。表舞台に上がってくんな」

翌日。佐藤君が私に告白された事を聞きつけた遠山が、早速佐藤君とエッチした事は言うまでもない。そして遠山はとんでもない事をしてくれた。

振られてから二日後。教室に入ると皆がじっと私を見つめてきた。机の中には使用済みのコンドームが入っていた。遠山が後ろから近づいてきて私の肩をポンと叩いた。

「佐藤くんが使ったコンドームだよ」

家に帰り、私はコンドームを食った。そして、吐いた。

胃の中のを全て吐き出した後、私は台所に立ち、鍋をコンロの上に置いた。鍋に水を入れて沸騰させた。水をぐびぐび飲んだ。勢い良く顔を鍋の中に突っ込んだ。数秒で顔を離した。脊髄反射に抵抗する事は出来ない。仕方ないから鍋の中の熱湯を頭にぶっつけた。私は暴れ狂い、頭を食器棚にぶつけた。

裏庭に新聞紙をかき集めた。ライターで火を付けた。勢い良く燃えた。私は炎に向かって倒れこんだ。顔面から炎に突っ込んだ。

私は病院に運ばれた。

病院の鏡で始めて自分の顔を見た時、思わずガッツポーズをしそうになった。鏡の中には腫れ上がり、原型がつかめないほどのぐちゃぐちゃフェイスになった私がいた。気持ち悪かった。怖かった。不気味だった。それでいい。

もう恐れるものはない。私は誰にも恐れる事のない人間になった。

病院を抜け出し、美人の顔面に嘔み付いたりしながら早歩きで学校へ向かった。途中ですれ違った生徒たちは驚愕、好奇、畏怖の目を私に向けていた。悲鳴をあげる女もいた。逃げる奴もいた。またイライラが募り始めたから、畏怖の表情でガン見してくる同級生の女に駆け寄ってみた。

「こ、来ないでよ！」

女は悲鳴をあげて逃げ出した。だから追いかけて腕をひつつかんだ。私はブスだし頭悪いし運動も苦手だし好きじゃないけど、何故か走るのだけは昔から異常的に速かった。

「どうして逃げるの？」

「どっか行けよ化け物！」

女は喚き散らした。

「ねえ、どうして逃げるの？ 私ただ歩いてただけだよ」

女はついに泣きだした。

「私が何かした？ ねえ、何がそんなに怖いなの？」

女は言った。

「なんだよその顔！ グロいんだよ！ 死ね！ 化け物！ 幽霊！ 顔腐ってんだよ！ 触るなよー！」

私は腕を離してあげた。女は座り込んでびいびい泣いた。泣き顔はブサイクだった。

教室に入ると、雑談に花を咲かせていた室内が静寂に包まれた。数人の女子生徒の断末魔が静寂をぶち壊した。私は特に大きな悲鳴をあげた女に走りより、机に両手を置き、ぐいっと顔を近づけた。

「どうしたの？ いきなり叫びだして」

「そ、その顔……」

「ん？ 顔？ 顔がどうしたの？」

女は後ろに下がり、壁にぶつかった。私はじりじりと近寄った。

「顔がどうしたの？ ねえ、どうしたの？」

童顔で愛くるしい顔をした女は悲鳴をあげて廊下へ飛び出した。教室中が絶叫に包まれた。良い感じ。私はクラスのリーダー格である村山を探した。村山は自分の席に座ってポカンとしていた。

村山の前に仁王立ちになり、私は言った。

「ねえ」

「え……」

「いつもみたいに、悪口言わないの？」

「いや……」

「キモイとか。見てるだけで殺したくなる顔とか。いつもそういう事言ってるじゃん。ねえ、言わないの？」

「……」

「どうしておとなしいの？ ほら、いつもより更にキモい顔になってるよ。ほら、言ってみろよ」

「その、いや……。キモく、ないよ」

「あ？」

「く、詳しい事は、何も、知らないけど。なんか、事故にあって、そうなったんだろ？」

「違うよ」

「え？」

「自分からこういう顔になったんだよ。つまり、整形」

クソ野郎は今にも震えだしそうだった。

何をそんなにビビってる？

ブスをいじめる事が出来るのにグロテスクな顔した奴をいじめる事は出来ないのか？ そんなのおかしい。理に適ってない。むしろもっともって悪口を言えるんじゃないの？

「なに弱気になってんの？ ねえ、なんで？」

「う、うるせーよ！ 近寄んなよ！」

簡単な事だった。

ブスはいじめられる。虐げられる。損をする。

人間は内面で勝負？ ブスでも性格が良ければ人に好かれる？

じゃあ美人で性格が良い女とブスで性格悪い女が横に並んでたらどうなる？

つまらない話だ。

ブスで損するくらいなら。

畏怖する存在になればいい。

私は村山に顔を近づけた。両手で顔を挟んだ。そしてキスをした。村山はキチガイのように絶叫した。地獄の表情。助けを乞う狂気。

唇を離し、私は叫んだ。

「一生記憶に残るぞ。潰れた女にキスされたんだ。しかも皆の前で！ これからお前はずっと、その汚い口で飯を食うんだ。可愛い女の子と汚れた口でキスするんだ。あははっ。あはははっ」

男子生徒達が村山を助けに来た。

なんだよ。

私の時は誰も助けてくれなかったのに。

面白くない。

だから私はカバンからオイルが入った小さなタンクを取り出した。みんな呆気にとられていた。空気も人の動きも固まった。村山は何かを悟っていた。起き上がろうともせず、まばたきもせず、この気色悪い顔を見上げている。

私はオイルを村山の顔面にぶっかけた。そしてポケットからライターを取り出して、村山の顔に火を付けた。

村山の顔は豪快に燃えた。

数日後、遠山は私に土下座した。遠山はいじめをしなくなった。

村山はもちろん、自殺した。そして私も、まさに今、ビルから飛び降りる。

そりゃそうだよね。だって、ブスに生きる権利は無いんでしょう？



## 第五話 放火魔 岩野 有斗

藤田さんのアパートが燃えている。猛烈な吹雪の中で勢い良く姿を無くしていくアパートを見て、俺は笑っていた。開け放たれた窓から入ってくる冷気なんて気にならなかった。死ぬほど面白い。床に寝転がり、腹が痛くなるまで笑い転げた。

笑って笑って、外に出た。炎上するアパート。野次馬。そして野次馬から離れた所に立ち尽くす白コートの女、遠山紗月。俺は笑うのをやめた。

紗月が俺に気が付き振り返った。すぐに分かった。遠山紗月が藤田さんのアパートを燃やしたのだと。もちろん、その理由も。

紗月はビッチになり、いじめっ子になり、随分と狂ってしまった。彼女は元に戻りたかった。諸悪の根源を潰したかったのだ。

でも意味がない。藤田さんのアパートを燃やしてもどうにもならない。

紗月と視線が合う。顔が赤い。酒でも飲んでいるのかもしれない。紗月は無表情で頷いた。何に対して頷いたのか分からなかった。俺は紗月に背を向けて、逃げた。

紗月、ダメだろう。意味がない事をして、ダメなんだ。

葬られた子どもは、戻ってこないんだから。

翌日。藤田恵子の死亡が確認された。出火場所はもちろん藤田さんの部屋、二〇三号室のドアの前。大量の新聞紙に火が付けられていた。寝ていたせいで火事に気がつくのが遅く、起きた時にはもうドアから逃げる事は困難になっており、建て付けの悪い窓はうまく開かず、そのまま死んだのだろうと言われていた。

放火事件が迷宮入りになるとは思えない。日本の警察は鼻でもほじりながら遠山紗月を逮捕するだろう。それは困るし、可哀想だと思う。

だから俺が罪を被る事にした。やり方はもう決めている。

計画の実行は二月十五日。特に意味はない。ただキリがいいから。

もう時刻は十二時を切って二月九日になっている。俺の人生が終わるまで一週間。せいぜい楽しもう。

土曜日。計画実行まであと七日。

今日は昼から爺ちゃんが経営するイノンチプという本屋でアルバイト。店長職とバイヤー職を務める爺ちゃんは海外旅行に行っているの、いま店を守っているのは俺とパートのおばちゃんだけ。貧弱な体制だ。

店の規模は小さく客も全然来ない。近所の美容室とか歯医者さんの定期置きや、ネットが使えず街まで足を運ぶことも面倒なお年寄りのおかげでなんとか成り立っているような本屋だ。仕事内容はレジ打ち、返本、梱包、袋詰めや輪ゴム掛け、入荷した本の陳列、本棚整理、電話対応。他にも細かい作業は多々あるが、やる事自体は難しくない。

「いらっしゃいませー」

真面目そうな女子高生がやって来てカウンターの前に立つ。

「本の取り寄せお願い出来ますか？」

低姿勢でしっかりとしゃべる女の子だ。安心して承り書をカウンターに置く。

「こちらにタイトルとお客様のお名前とお電話番号をお願いします」

「えっと。タイトル分からないんですけど」

死ね。

「申し訳ありませんが、タイトルが分からないとちょっと、お取り寄せは出来ないのですが……」

「関ジャニが表紙のテレビジョンなんですけど」

女子高生は困り果てた顔をしている。困るのはお前の方じゃない。俺だ。なぜ、俺が悪いみたいな態度をされなきゃいけない。殺すぞ。

「週刊と月刊と増刊と……。とにかく色々あるんですけど、どのテレビジョンか分かりますか？」

「えっと……。分かんないんですけど」

いいから死ね。

女子高生はスマホをいじり始めた。十分後、歓声をあげた。

「あ、多分これです！ 月刊の十一月号！」

家で調べてから本屋に来い。親の遺伝子に障害でもあったのか？

パソコンで在庫を調べる。もちろん無い。出版社から取り寄せるしかないが、そうなると二週間くらいかかる

。「出版社から取り寄せる事になるんですが、その場合二週間くらいかかりますけど、宜しいでしょうか？」

「え……。二週間もですか？」

パソコンを操作して、アマゾンの月刊テレビジョン十一月号の商品ページを表示する。女子高生にパソコンの画面を見せる。

「アマゾンで売ってますよ」

「いやでも私、パソコン全然出来なくて……」

「家にネットはあるの」

「あります」

アマゾンの会員登録と買い方を教えてやる。女子高生は喜んだ。

「ありがとうございます！ 家に帰ってやってみます！」

おう、もう二度と来んなよ。

夕方。事件発生。週刊ジャンプを毎週取り置きしている人がいるのだが、昼のシフトに入ってるパートのおばちゃんを取り置きしておくのを忘れていたらしい。しかも運悪くジャンプの在庫は無くなっていた。これはまずい。

「ジャンプ無いの？ どういう事？」

三十代後半の男は結構キレていた。俺は言った。

「……いま在庫を確認しますので、少々お待ち頂けますか？」

「あ？ しょうがねえなー。じゃあちよっとそこのスーパーで買い物してくるから」

客は店を出て行った。チャンス。俺はレジから二百四十円を取り出して、向かえにあるセブンイレブンに行った。運良くジャンプが一冊残ってたから、それを買って店に戻った。

すぐに客が戻ってきた。いま買ってきたジャンプを二百四十円で売った。レジを打つと二百四十円の違算になるから、ただひっそりと二百四十円をレジの中に入れた。プラスマイナスゼロ。あのクソババア、いつも偉そうにしてるくせにミスが多い。俺が機転を利かさなかったら大変な事になっていた所だ。

夜。小学校からの付き合いがある佐伯可奈子がやってきた。俺みたいな地味な奴が可奈子みたいにちょっとガラ悪くて可愛い女の子と仲良くしてられるのは、小学校からの縁があるからだ。俺と可奈子はタイプが違う人間だが、何故か昔から気が合った。

「やっほー」

可奈子は黒色のコートで羽織り白色のスカートを履いていた。カウンターの前にずかずかとやって来る。

「それ欲しいんだけど」

「あ？」

可奈子は俺が手に持っているヤングマガジンを指さしている。

「まだ全部読んでない」

睨みつけられる。仕方なく雑誌を閉じてスキャンする。可奈子がお金を出し、俺はお釣りを返して雑誌を袋に入れて渡す。そして暇人はカウンター横の横に置いてある椅子に勝手に座り、喋り始める。

「もう少しで三年生じゃん？」

「バカナコは進級出来るのか」

「アンタ、卒業したら何するの」

「考える必要はない」

「ニートにでもなるの？」

「お前はどうすんの」

「専門学校」

「ふうん」

「紗月はどうすると思う？」

俺は黙りこむ。可奈子はもちろん俺と紗月に事件があった事を知らないし、そもそも俺達に面識がある事すら、可奈子含めて誰も知らない。

「俺に聞かれても困る」

「風俗嬢とかになったら、どうしよう」

「さあ」

「なんでこうなっちゃったんだろ」

「ビッチはどこにでもいる。沢山いる訳じゃないけど確実に存在する」

「まあ、そうだけど」

「いじめっ子は星の数ほどいる」

「うん」

「だからビッチないじめっ子が居ても不思議じゃない」

「そういう問題じゃなくて」

「なんだ」

「あ、でも、うん。最近、いじめはしてない。ほら……」

「藤ヶ崎事件か」

「そう」

可奈子は紗月と藤ヶ崎と同じクラスだが、あの日は学校をサボっていたらしい。つまり、暴走を止める人間が居なかったという事だ。俺はクラスが違うから現場は見えていないけど、相当悲惨な光景だったらしい。紗月がいじめをやめるのも、当然だろう。

可奈子は何度もため息をついた。

「でも援交はまだ続けてる。あのね、紗月は色々あって変わっちゃったんだよ。元に戻ってほしい」

「いつかやめるさ」

「アンタ冷たくない？」

「可奈子」

「なに」

「お前、彼氏いるのか」

「いないけど。なんで」

「なんとなく」

「アンタこそどうなのよ。いるの？」

俺は何も答えなかった。まあ、そんなもんだろう。可奈子は追求せず、黙って立ち上がった。

「じゃ、帰るわ」

可奈子は帰っていった。相変わらず、シャンプーの良い匂いがした。

日曜日。計画実行まであと六日。

四十代後半の男がカウンターの前にやってきてコミックを一冊カウンターの上に置き、手に持っていた紙切れを見ながら自信満々に読み上げ始めた。

「妖怪激烈バトル！ 宇宙大戦編十二巻！」

「……」

「……」

「これ、合ってる？」

「はあ？」

「息子に頼まれた。これでタイトル合ってる？」

コミックのタイトルを確認。今聞いたタイトルと完全一致している。

「合ってますね」

「そう？ じゃ、これお願い」

一つ聞きたい。

お前、字が読めないのか？

電話が鳴る。出る。甲高くて、なんだかねばっこくぬるぬるした喋り方をする男だった。

「あの～。本の取り寄せしたいんだけどねー」

「で、ではタイトルを教えてくださいか」

噛んでしまった。男が笑った。

「ん～。なんかアンタ慣れてないねえ。新人かい？」

「まあ、そうですが」

本当はもう結構長いです。

「なに～。もしかして学生さんー？」

「そうです」

男がぶっと吹き出して笑う。

「おいおいダメだよ学生なんかに店番やらせてー。ちゃんとした従業員いないのお～？」

うっぜー！

「今は僕一人ですね」

「ふう～ん。ねえところでお宅の本屋さんさー。店の名前なんていうの？」

知らないで電話したのか。

「イノンチプです」

「はあ～？ イノンチプ～？ え、それ、どーいう意味なの？」

「えーとですね……」

「んー？ 変な名前だよなあ。そんな名前だから、お宅の店、いつも人居ないんじゃないのお～？」

「あの、本のタイトルは」

「ええ～？ なんかアンタ、信用出来ないなあ。まあいいや、えっとね……」

電話番号を紙切れにメモする。復唱しようとした瞬間、男に先手を打たれる。

「ちょっとアンタ、やっぱり信用出来ないから電話番号復唱してみなさい。三回だ。三回復唱して」

三回復唱すると、男は突然話しかけた。

「そうだ。お宅、何時までやってるのお〜？」

「九時までです」

「えー！ くじい〜？ ちょっとちょっとそれは長くなあ〜い？ 七時くらいで閉めていいんじゃないのー？ どうせ夜中に人なんて来ないでしょお〜？」

俺は電話をぶった切った。理由は簡単だ。何故なら、俺は真面目に仕事がしたいから。ちなみにイノンチプとは、アイヌ語でくそつたれとかバカ野郎という意味だ。

カウンターの後ろのテーブルにパソコンが置いてある。俺は画面を眺めて在庫の数をチェックしていた。後ろを振り向いた。四十代後半の女が物凄い形相で俺を睨んでいた。慌ててカウンターに駆け寄る。

「大変お待たせいたしました」

会計を済ませて商品を渡す。女は癩癩を起こした子どものように袋をひったくり、帰っていった。

そんなにイライラして、わざとらしく不貞腐れた態度取って私いまキレてますよとアピールするくらいなら、声をかければいいのに。

すみませーん。

会計お願いしまーす。

ちょっといいですかー？

そんな事すら、言えないのか。お前はこれまでの人生で何をしてきたんだ？

取り寄せしていた本が入荷した。電話をした。

「もしもし。イノンチプですが、お客様がご注文した『加工食品の危険に迫る』が入荷しましたのでお電話致しました」

『は？』

甲高い女の声。

同じセリフを繰り返す。

『あー。はいはい。あれね。ん、ごめん。もう読んだ』

「え？」

『ごめん、もう読んじゃった』

「もうお買いになったと……？」

『ふふっ。ごめんね。たまたま他の本屋で見つけたの。だ、か、ら、いらぬ。あはっ。ごめんね！』

電話を切る。売れそうもない本を入荷してしまった。今月も赤字だろう。

三十分後。三十代前半の男がやってきた。会計をする。千五十円。俺が値段を言う前に、男が千円札をカウンターに置き、笑顔で言った。

「釣りはいらねえよ」

「……」

男は無造作に商品をつかみ取り、颯爽と店を出ていこうとした。俺は叫んだ。

「お客さあん！ 五十円足りないです五十円！」

客を追いかけて小銭を受け取る。レジの中に入れる。驚愕する。

受け取ったのは五十円玉じゃなくて一銭硬貨だった。脱力感に包まれながら、自分の財布から五十円玉を取り出してレジの中に入れる。

もう、嫌だ。

夜の九時に閉店。家に帰る。一時間だらだらネット。二時間ゲーム。約二時間の映画鑑賞。そして、就寝。

月曜日。計画実行まであと五日。

学校へ行く。ホームルームは友達と雑談。授業が始まる。寝る。昼休みは購買で買った冷たくてパサパサの炒飯を食う。地味系軍団と地味な会話で地味に盛り上がる。ガムをくちやくちや噛みながら可奈子がやってくる。不良、美人、そもそも女に慣れていない地味系軍団は気まずそうに黙りこむ。

「岩野」

「なんだ」

「紗月、学校来てない」

「俺に言われても」

「皆に聞いて回ってる」

「電話とかメールは」

「反応無し」

「突然家出するのも、よくある話だ」

「何も知らないの」

「うん」

「分かった」

可奈子は教室を出て行った。なぜ可奈子はあんなに紗月にこだわるのだろうか。可奈子と紗月は幼稚園からの付き合いだから当然といえば当然だが、放っておけばいいのにも思う。

まあ、いいや。もう少しで、全てが変わるのだ。

バイトは休み。両親は仕事をしているから家には誰も居ない。飯は用意されてなかった。スーパーで二百九十八円の弁当、百円のおにぎり、七十八円の缶コーヒーを買い、自分の部屋でもそそと食った。ゲームして映画観て本読んで、寝た。

火曜日。計画実行まであと四日。

朝起きる。昼学校。帰宅。バイトへ行く。遠山紗月が行方不明だと騒がれ始めた。可奈子が店にやって来て愚痴った。

「あの子、親に虐待されてたのかも」

「どうして」

可奈子はまた勝手に椅子に座って缶コーヒーを飲んでいる。俺もいつものように椅子に座り、手に漫画雑誌を持っている。いつもの光景だった。

「体に傷がある。太ももとか、見えづらい所に」

「虐待もよくある話だ」

「喧嘩売ってんの？」

「俺達に何が出来る」

可奈子は缶コーヒーを飲み干し、ゴミ箱に放り投げた。

「紗月どこ行ったんだろう」

「俺」

「ん」  
「この店、燃やすんだ」  
「なんで」  
「さあ」  
「いつ燃やすの」  
「四日後」  
「なんで四日後」  
「放火しようと思った時、一週間後と決めた。キリがいいから」  
「へえ」  
「可奈子」  
「なによ」  
「色々悩みながらその悩みを解決して、また新しい悩みが出来て解決して。その繰り返しが人生だ」  
「出家でもすんのか？」  
「でも可奈子。どうあがいても解決できない悩みがあるとしたら、お前は どうする？」  
「さあ」  
俺は立ち上がり、吠えた。  
「ほら答えられない！ どいつもこいつも答えられないんだ！」  
可奈子は呆然と俺を見上げていた。おとなしく、椅子に座る。  
「可奈子」  
「悩みそ腐ったか？」  
「俺はちゃんと家がある。自分の力でお金を稼ぐ事も出来る。。頭や体に障害はない。両親はまあ、普通の人。学校に行けるくらいの金もある。虐待もされていないし、絶望的なこともない。ただ、どうしようもない悩みがある」  
「悩みあるんなら言え」  
「ただ少なくともハンデを背負ってる訳じゃない。飯食わせてもらって自分の力で小遣い稼いでいる子どもの俺に、不満を言う権利は、ない」  
「言うだけならいくらでも言っている」  
「ずっと前な、なんか色々嫌な事があって、パートのおばちゃんに愚痴った。死にて一とか、人生クソまみれだ一とか、そんな事言った」  
「で？」  
「パートのおばちゃん、真面目そうな顔になって、テレビで見たドキュメンタリー番組の話 시작했다。ガーナの子どもは飯食えず学校も行けず体はガリガリ。でも、働いてお金を稼がなきゃいけない。まさに地獄みたいな人生を送ってる。おばちゃんはそう言った」  
「おばちゃんは多分、アフリカをバカにしてる。ていうか、見下してる」  
「そうだろう。で、おばちゃんはあるきたりな事を言ったんだ。ガーナの人に比べたら、アンタは恵まれてるのよって。でもガーナ人と比べられても困るし、ガーナ人と俺の悩みは、また別なんだ」  
可奈子は大笑いして帰って行った。

可奈子が帰った後、五十代後半の女がやってきた。生地が薄そうなコートを羽織り、やたらとつばの広い帽子をかぶり、ハイキングにでも行くんですかってくらいに大きなリュックサックを背負っていた。女は何かのチラシをカウンターに置いた。

「あの、これ、これね取り、取り寄せ、したいんだけどね」

今すぐぶっ殺したくなるくらいに細く甲高く、鼻が詰まったような声で、何故か無駄に早口で歯切れの良い喋り方で無性に気に障る。チラシには英語の教材八巻セットの説明が書いてあり、下の方には注文するための入力欄があった。ここに名前とか電話番号とか冊数を書き、書店に持っていけば本の注文が出来るし、個人で直接出版社に注文する事も出来る。

「こ、これ注文、書けば取り寄せ、してくれ、る、るるんですか」

「あ？」

脊髄イカれてんのか？

「ここで頼んだら、そ、送料とか、かかるんですか」

「本屋で注文した場合送料や手数料はかかりません」

「しゅ、しゅしゅ、出版社に頼んだら、お金かかるの」

知るか。

「送料がかかるかどうかは、ちょっと分かりません」

「ここと出版社で、ど、どど、どっちで頼んだ方が、いいのかしら。送料かかるなら、ここで、頼もうかしら」

「少々お待ちくださいませ」

出版社に電話をかける。聞く。送料はかからないが代引き手数料が二百円かかるらしい。本屋で頼めば送料はかからないが、客が直接取りに来なければならぬし届くまで時間がかかる。しかしたった二百円で家まで運んでくれるなら、出版社に直接頼んだほうが良いだろう。それにこいつが注文したいのは分厚い教材八巻セット。わざわざ本屋に取りに行き、持って帰るのは大変だろう。

「そそ、それなら。二百円もったいないから、ここで頼もうかしら」

つーかそれくらい、自分で出版社に電話してくれ。サービス業は大変だ。

注文の処理を終えて、客は帰っていった。

六十代の男がやってきた。

「東京再開発2020という本、ありますか」

パソコンで調べる。ありません。

「そのようなタイトルはありませんね」

「じゃあ、取り寄せて」

「いや、ですから、そのようなタイトルの本が存在しないんです」

「なんで」

日本語が通じない。これも、よくある事だ。

「タイトルをお間違えになっているのではないのでしょうか。似たようなタイトルなら見つかりましたが」

「そんなはずはない」

お引き取り願えませんでしょうか。

「でも、まあ、しょうがない。調べてからもう一度来ます」

本のタイトルを覚えられないくせに堂々と本屋に来ちゃうお前のようなキチガイが何をどうやって調べるっていうんだ？ アホか。ていうか調べる能力が無いからタイトル分からないんだろう。タイトルじゃなくて無くした脳みそがどこに落ちてるのか調べてこい。アホか。死ぬ。くたばれ。

閉店間際。七十代のお婆ちゃんがやってきた。

「えーと。あれよあれ、あの本、タイトル覚えてないんだけど……。あの、あの本、取り寄せてくれないかい？」

おう、ぶっ殺すぞ。



「テレビで見たのよ。おーさまのランチ？」

「タイトルは？」

「分からないんだけど」

「タイトルが分からないとちょっと……。作者名とか分かります？」

「アンタ、テレビ見てないのかい」

「テレビは見ません」

「じゃあ、世間知らずなんだね」

すみません。俺はアンタみたいに家にこもってないで、外の世界を見てるんです。知ってますか？ 世の中には、家を燃やす女の子がいるんですよ？

「申し訳ありません。ですが、せめて作者でも分からないと、ちょっと調べられません」

「困ったね……。ほら、あれ、あれなのよね」

お前、本当にその本欲しいのか？

「申し訳ありませんが、タイトルを調べてから来て頂けませんか」

死にぞこないのババアはうんざりした顔でため息をつき、憐れむような目で俺を見て、店から出て行った。

みんな、聞いてくれ。

俺は、エスパーじゃない。

水曜日。計画実行まであと三日。

学校へ行き、家に帰り、イノチプへ行く。今日は客が少なく、特に何もなく終わった。スーパーで半額になっていたたこ焼き、サンドイッチ、おにぎり、りんごジュースを買った。家に帰って自分の部屋で食った。ゲームやったり本読んだりして、寝た。

木曜日。計画実行まであと二日。

紗月は未だ行方不明。死んでいるんじゃないかという噂が流れ始めた。可奈子は何度も紗月の家に行っているが、親が出てきた事は一度も無いらしい。東京に行っている姉との連絡も取れないらしい。紗月の親については未だに謎が多く、どういう人なのか、どういう生活をしているのか、紗月とどういう関係なのか、多分誰も知らない。

昼休み。購買で輪ゴムのような味がする焼きそば弁当とイチゴオレを買った。廊下を歩いている時、一年生の教室になんとか視線を向けた。ドアは開いていて、めちゃくちゃスカートが短くめちゃくちゃ可愛い女の子と地味な男子が楽しそうにゲームの話をしていた。俺も昔は可奈子と楽しく色々な会話をしていた。でもある時から可奈子を避けるようになり、今でも親しい事には変わりはないが、昔のように屈託のない笑顔で会話する事は無くなった。全部俺が悪い。

何故か、見知らぬ一年生の女子に対抗心が芽生える。あの女より可奈子の方が足細いし綺麗だし短いスカート似合ってるし、顔だって百倍可愛い。ガラ悪いし不良っぽいけど、裏表が無くてまっすぐで、大らかでユニークで、普通が嫌いでなんか面白くてノリが良くて、嫌味がなくて、本当に、素晴らしい女の子だ。

可奈子と普通に話せていた時期が、懐かしい。でもそれは中一の時までの事。遥か昔の思い出だ。

放課後。地味系軍団と一緒に帰った。奴らは途中でオモチャ屋に寄り、トレーディングカードゲームを買った。そして自由に遊べるようにと用意された席に陣取り、カード対戦を始めた。バイトだからと嘘をつき、俺は一人で帰った。

帰宅。昼寝。起きたら久しぶりに母親がいて、米と味噌汁と魚と唐揚げとサラダを食った。風呂に入り、音楽

聴きながらネットをやり、本を少し読んで、寝た。

金曜日。計画実行まであと一日。

紗月、未だ失踪中。昼休み、珍しく俺から可奈子に話しかけた。

「可奈子」

「なに？」

「ちょっといいか」

「はあ？」

教室を出て、俺と可奈子は音楽室に行った。可奈子はピアノでアニメソングを弾き始めた。しばらく耳を澄ませていた。可奈子は無表情でピアノを弾き続けた。幸せではなかった。俺は言った。

「紗月はとあるお婆さんのせいで、人生ぶっ壊れた」

可奈子がふいに指の動きを止めた。静寂。

「どうした？」

「……アンタ、何か知ってるの」

「何が起きたかは、紗月の名誉のために言えない」

「それで？」

「紗月の事を抜きにしても、俺だって人並みに、ジンセイというものに対して色々考えたりはする。でも、そういう細かい事はどうでもいいし、考えるのも面倒くさい。それに自分の考える事もよく分からない。だから俺は簡潔な答えを出した」

「言ってみて」

「紗月を少しでもいいから、助けたい。別にそれだけでさ、十分なんだと思う」

なぜ今ごろ藤田さんのアパートを燃やしたのか。どうして運良く藤田さん以外の住人が居なかったのか。その事だって多分、紗月はあの日たまたま藤田さんのアパートの近くを通って、酒に酔った勢いで燃やした。そして偶然藤田さん以外の住人は全員留守だった。そんなもんなんだろう。多分、そうだ。

「どうやって助けるの。ていうか、もしかしてアンタ、紗月がどこに居るのか知ってるの。紗月とどういう関係なの」

「知らない」

「ねえ、さっきから何が言いたいの」

「可奈子。お願いがある」

俺は椅子に座る可奈子の正面に立ち、彼女を見下ろした。シャンプーの匂いが漂う。

「なに」

「抱きついていい？」

可奈子は目を見開いた。そして顔を真っ赤にして、頷いた。俺は黙って可奈子を抱きしめた。調子に乗って頭を撫でた。可奈子が言った。

「どうしたの。いきなり」

「なんとなく」

「あの……。その。なんつーか……。あの、あのさ、岩野。私達さ、ずっと変だったけど。ていうかアンタが変だったけどさ、でもさ、何か、悩みがあるなら、なんでも言って欲しいっていうか。その……」

俺は可奈子から体を離した。

「何を言っているのか、よく分からん」

学校が終わり、イノンチプでバイト。三十代後半の男がカウンターの前までやって来る。

「ここ、予約とか出来ますか」

「出来ますよ」

「惨苦物語の八巻で」

承り書をカウンターに置く。

「ここにお名前とお電話番号と本のタイトルをお願い致します」

客が必要事項を書き、顔を突き出して言う。

「この本っていつ発売するんですか？」

「は？」

「発売日、いつか分かりますか？」

驚きだ。発売日も分からない本の予約をする人間が居るなんて。

ポケットからスマホを取り出し、「惨苦物語 八巻」と検索する。一番上に表示されたアマゾンのページを開く。発売日は三月二十五日と書かれていた。四ヶ月くらい先じゃねーか。

「三月二十五日ですね。あと、特装版と通常版がありますね」

客は鼻で笑った。

「いやだから、特装版が欲しいからわざわざ予約するんじゃないか」

それはそれは申し訳ありません。あやうく通常版を予約する所でした。

「入荷したらお電話でご連絡致しますか？」

「ああ、よろしく」

「では入荷次第、お電話致しますね」

多分、こいつは予約した事を忘れるだろう。なにせ発売日を把握していない本の予約をするくらいなんだから。

間抜け男の後ろに並んでた中年の女が質問をしてきた。

「ここ、図書カード売ってるの？」

「売ってますよ」

ていうか、カウンターの前に「図書カード販売中」と書かれた看板が置いてありますよ。お前は失命してるのか？

「え、ここの図書カードはどこでも使えるんですか？」

むしろ限られた本屋でしか使えない図書カードがあるなら、見てみたい。

「どこでも使えますよ」

「あ、そうなんだ。ふーん。あ、分かりました」

客は帰っていった。意味が分からない。

五十代後半のせわしない男がやって来た。三百八十円の雑誌をカウンターに置き、一万円札を皿の上に載せた。小銭を出さないかどうかしばらく確認。財布をいじっている様子はなくぼんやり俺を見ている。

「一万円、お預かり致します」

一万円をレジの中にしまい、一万円と入力し現計ボタンを押してレシートを出し、お札を数える。顔を上げる。驚く。男はのろのろと財布の中を漁り始めていた。

おいおい。それはさすがにマナー違反というか、遅すぎだろう。

客は何食わぬ顔で小銭を皿の上に置いた。もうレシートは一万円の預り金で出してしまった。仕方なく引き出しから電卓を取り出した。小計さえちゃんと入力していれば、レシートと違う預かり金をもらっても、レジのお金は合うから再計算しても大丈夫。小学生でも出来る計算だが、一応計算間違いの無いように一万八十円から

三百八十円を引き、また一応お札を数えた。客がキレ始めた。

「ん？ え、え、え。あ、いくら？ い、いいいっいくらなのさ？」

キレそうになりながらもお札を返す。残るお釣りは七百円。

「あれ、お金もう全部返してもらったっけ？ ん、ん、い、いやだから遅いんだって。早くして早くして。んんー、んーもう何トロトロやってんの。えーもうこれでいいの？ 全部渡してもらったよね？」

もうどうでもよくなった。

「あ、もう全部渡しましたよ」

「あーうんいいんでしょいいんでしょ。これで全部でしょ」

客はやっぱりせわしくなく帰っていった。俺は七百円をポケットの中に入れた。

バイトが終わり、五百五十円と高価な弁当と百五十円のジュースを買い、家で食った。丁度七百円消費した。映画を観てネットやって、寝た。

土曜日。計画実行日、当日。午後四時半。

住宅地の外れにある旧町内会館の中に入る。今は使われておらず、建物の中には何もない。唯一見当たるのは、遠山紗月だけ。

紗月は両手両足をロープで縛られ、口にはガムテープが貼り付けてある。腹に巻きつけたロープは柱にしっかりと結びつけている。紗月はぼんやり座り込んでいた。俺を見ても反応無し。紗月のそばには大量の保存食と水が置いてあり、パンツが落ちている。冬だから食べ物は腐りにくいし、トイレの目の前の柱に結び付けてるから排泄の心配もなし。俺なりに配慮したつもりだ。

遠山紗月を監禁した理由はただ一つ。一週間経つまでに紗月が捕まったら困るから。

「紗月。もういいぞ」

俺はロープをほどいてやった。でもガムテープは外さなかった。会話をしたくなかった。これは俺の個人的で一方的な計画なのだ。いくら紗月のために実行すると言っても、彼女と何か話しをする必要はない。

「監禁して悪かった。本当にごめん」

それ以上何も言わず、俺は町内会館を出た。

冬は日が暮れるのが遅い。時刻は五時。空は藍色で、まだ明るかった。

俺はイノンチプの前に立ち、息を大きく吸った。この店は藤田さんの家の近くだから紗月を助けるためとしては都合が良い。それにこの本屋は気に食わない。訳分からん客の相手してると頭がおかしくなる。

俺はイノンチプの中に入り、ガソリンをばら撒き、ライターで火を付けた。

イノンチプは豪快に燃えた。俺はぼんやりと燃えるイノンチプを見ていた。野次馬の悲鳴。救急車のサイレンの音。雪がちらちらと降っていた。だからなんだ。札幌は毎日のように雪が降っている。

藤田さんのアパートが放火され、数日後には近所にある本屋も放火された。これは同一犯の可能性が高い。そしてイノンチプが燃えている現場で、一人の少年が突然狂ったように叫ぶ。

「うわー！ もう嫌だー！ あー！ うわー！ みんな死んじまえー！ クソつたれな客みんな死んじまえー！ くそーっ。こんな本屋があるから悪いんだ。この店さえ無きや、こんな辛い思いしなくて済んだんだ。人間がアホだって事にも気づかなかつたんだー！」

野次馬達は病的な少年を一斉に見る。皆が目撃者だ。

「藤田のクソババア！ お前もムカつくんだよ！ ちょっと一回家に遊びに行っただけで、毎日電話してくんじやねーよ！ うぜーんだよ！」

警察官が駆けつけてくる。俺はポケットからナイフを取り出し、振り回しながら警察官に立ち向かう。若い警察官は拳銃を構える。紗月がいつか、好きな人と結ばれ子供を産める日が来る事を祈りながら、警察官に向かって突進する。

そして、警察官は、拳銃の引き金を引いた。

## 第六話 オタモイ海岸 松井 太一

---

今は使われていない旧町内会館の扉を開けた。床はひどかった。嘔吐物、小便。そして裸でぶっ倒れている遠山紗月。長い黒髪はべとべとで、口から血を吐いていた。

紗月は目を瞑っていた。俺は声をかけた。

「紗月」

やっと目を開いた紗月は驚き、そして笑った。

「た一君」

「た一君はやめろ」

「なんでここに居るの」

「帰ってきた」

紗月とは幼稚園と小学校が同じだった。俺は中学生になる前に青森に引っ越した。そして高校三年生の春、札幌へ戻ってきた。紗月と会えるのが楽しみだった。俺は特別バカという訳ではないが、偏差値四十の香連高校の転入試験を受けたのも紗月に会うためだった。

紗月は学校に来ていないみたいだった。可奈子に色々話を聞いたが、簡単に言うとビッチでいじめっ子でどうしようもないクズに成り下がってしまったらしい。噂によると放火とか、そういうマジな犯罪にも手を染めているらしい。

ここ数日はどこに居るのか誰も知らなかった。紗月の両親に話を聞いても「どうでもいい。知らない」と言うだけだった。お姉さんも今どこで何をしているのか、分からなかった。紗月と仲の良い奴らに片っ端から色々な情報を聞いた。やがて旧町内会館に入り浸っているという噂を聞いて、ここに来た。

「紗月」

「なあに」

「何してるんだ」

紗月はのろのろと立ち上がり、床に置かれている鞆から1万円札を六枚取り出した。

「た一君」

「なんだ」

「遊びに行こう」

「その金、どうした」

「知らないおじさんにもらった」

「援交でもしてんのか」

「うん。最近あのおじさんSMに目覚めたの」

「紗月」

「なに」

「色んな噂聞いた。お前はビッチで、いじめっ子で、犯罪者なのか」

「うん」

「紗月。戻れ」

「どこに」

「普通に、戻れ」

紗月はふらふらと俺の目の前に立ち、一万円札を顔にくしゃっと押し付けてきた。

「た一君。私ね、中一の時、妊娠したの」

「はあ？」

「藤田さんっていうおばさんの家でね、監禁されて、一緒に居た男の子と無理やりエッチさせられて、妊娠した

」

「……」

「その話を親にしたらね、出て行って言われた。面倒な子供を養いたくないって。だから家を出て、今は叔母さんの家に住んでる。子供は中絶した」

「お前は産みたかったのか」

「産みたかったけど、産める訳ないじゃん」

「好きでもない奴の子どもが欲しかったのか」

「違う。人を殺したくなかった」

「お前は被害者だ」

「た一君。お金、いっぱい貯めた。私、結婚してまた子ども産みたい」

「病院に行こう」

「産婦人科？ バカだなた一君。まだた一君の精子はもらってないよ」

「違う。精神病院だ」

俺は散らばっていた真っ黒のワンピースを紗月に着せた。手を握り、引っ張りながら町内会館の外に出た。

「た一君。いま、幸せ。また会えた。めちゃくちゃ嬉しい」

「ん」

「た一君。好きだよ」

「ん」

「ピッチでいじめっ子で犯罪者の私に会いに来てくれた」

「俺は過去にすぎるタイプだ」

振り返ると、紗月は子どもみたいなアホ面で笑っていた。気の抜けた笑顔。こいつを狂わせた奴らを全員ぶっ殺してやりたかった。

自分の家に紗月を連れて行った。体に傷が沢山あったからとりあえず絆創膏を貼ってやった。風呂にも入れてやった。熱いコーヒーでも飲ませてやろうと思い、台所でコーヒーを淹れて部屋に戻った。紗月は床に座っていたが、俺が部屋に入った瞬間体をビクンと痙攣させ、取り繕ったような笑みを浮かべた。

「どうした」

「いや、なんでもない」

テーブルに熱いコーヒーを置いたが、紗月は手を付けず興味深げに俺の部屋を漁っていた。そして探索に飽きるとベッドに座り込んだ。紗月の隣に座る。懐かしい気持ちになった。

「ねえた一君。いつ戻ってきたの」

「最近」

「なんで手紙とか、くれなかったの。私いつも送ってたのに」

「歯がゆいからな」

「た一君。私ね、色んな人と付き合ったよ」

「ふーん」

「嫉妬した？」

「なんで？」

紗月は頬を膨らませ、俺の肩を小突いた。

「これまで付き合ってきた奴らね、全員クソだった。一緒に居てもね、何も感じないの。あいつらじゃ、ダメだった」

「でもやりまくってた」

「恋人からお金は取らないけどね」

「俺、高二の夏に童貞卒業したんだ」

「どんな子と？」

「その時付き合ってた彼女。可愛い子」

「ふうん」

「苗字が遠山だったから、ずっと遠山って呼んでた」

「普通下の名前と呼ぶんじゃないの？」

「名前を間違えても、バレない」

「なーるほど」

紗月は俺の上にちょこんと座った。頭を優しく撫でてやると、安心したように俺の胸に頭を預けた。

「た一君。お願いがあるの」

「なに」

「お姉ちゃんを殺してほしいの」

「お前、俺の事嫌いだろ」

「た一君にしか頼めない」

「再会して早々、物騒すぎる」

「もし殺してくれたら、私普通になれるかもしれない」

「沙織さんは今どこに居るの？」

「アパートで一人暮らししてる。しばらく東京に居ただけだね、最近札幌に戻ってきたんだ」

「とりあえず話を聞きたい」

「分かった。じゃあ行こう」

遠山沙織はボロいアパートに住んでいた。カギのかかかっていないドアを開けると、悲惨な空間が視界に飛び込んできた。

マグカップ、灰皿、ぬいぐるみ、目覚まし時計、ノート、ドライヤー、コンビニ弁当の容器、菓子パンの袋、食べかす、大量の服などなど。色々な物が散らばっている。女の部屋には見えないというより、人間の部屋に見えなかった。

部屋の中央に置かれた小さなテーブルにはパソコンの液晶、キーボード、マウスが置いてある。ケツまで伸ばした長い黒髪をポニーテールでまとめた遠山沙織は熱心にペンタブを動かしていた。

「お姉ちゃん」

沙織さんが振り返った。どれほど壊れているのかとビビっていたが、特におかしな様子はなかった。

「あら、その子誰？」

喋り方も普通だった。昔と変わらず透き通った綺麗な声。

「た一君」

「た一君……マジで！？ 久しぶりじゃん！ 帰ってきたの？」

「はい。最近ですけど」

「うっそーカッコ良くなったじゃーん。あ、ちょっと待っててコーヒー淹れるから」

沙織さんは台所でコーヒーを作ってくれた。まずいレギュラーコーヒーだった。紗月と沙織は楽しそうに話し始めた。少なくとも、紗月が沙織さんに殺意を持っているようには感じられなかった。

俺はコーヒーを一口飲んでから、聞いてみた。

「沙織さんって絵好きでしたっけ？」

パソコンの画面には描いてる途中の女の子のイラストが表示されていた。そこそこ上手い。



「ん。まあね」

紗月がぬいぐるみを膝に置きながら、言った。

「お姉ちゃんね、最近まで東京でラジオのDJやってたんだよ」

「凄いじゃないですか」

「ん。でもクビになった」

「どうして？」

「生放送で言っちゃいけない事言ったらね、クビになったの」

「なるほど」

そして札幌に帰って来たという事か。じゃあなんで今、絵を描いている？ DJの次はイラストレーターにでもなるつもりか。

「これ見て」

紗月がパソコンのマウスを操作してホームページを表示した。そのページにはそこそこ上手いイラストが沢山掲載されていた。プロフィールのページには「イラストレーター目指してます」という文章が太字で書いてあった。

「お姉ちゃんはね、夢を追いかけているタイプの人間なの」

紗月が分かりやすい説明をしてくれたので、なんとなく沙織さんの事情は飲み込めた。夢を追いかけてる人間は、色々と厄介なのだ。

「沙織さん、何歳でしたっけ」

「二十二。今年で二十三になる」

俺は黙り込んだ。夢を追いかける年齢としては、ちょっとキツイ。

紗月が深い溜息をついた。

「疲れたんだって」

「え？」

「だから、お姉ちゃん。なんか色々疲れたんだってさ。だから死にたいんだよね？」

沙織さんは頷いた。

「うん。死にたい」

「そうですか」

「でもね」

沙織さんは頭をぼりぼりと掻いた。

「死ぬの、面倒くさいんだよね」

クズを代表するクズが、そこには居た。上から下まで完膚なきまでにクズだった。

沙織さんは夢を追いかけるタイプの人間。でもなんか色々疲れた。だから死にたい。でも死ぬの面倒だし、自殺するには労力を必要とするし、それに怖い。でも死にたい。だから手っ取り早く私を殺してほしい。

三行で説明できる。これでは納得できない。

「沙織さん」

「うん？」

「頑張ってください」

紗月が俺の肩を小突いた。

「お姉ちゃんは死にたいんだよ。手伝ってあげようよ」

「お前が一人でやれよ」

「嫌だよ。だって人殺すの怖いもん」

「俺も怒る時は怒る」

「お姉ちゃんを助けたくないの？」

「映画一本分のプロットが沙織さんにあって、その話を俺が聞いて同情して涙を流せば、手伝う気になるかもしれない」

紗月がカバンから通帳を取り出した。

「見て」

言われた通り通帳を見て、俺は固まった。その残高なんとビックリ五百万円。

「お前」

「予想以上だった？」

「何人とやったんだ？」

「援交は最強のビジネスだよ」

「援交で五百万円も稼げるかよ」

「中一の頃からやってるんだよ？ それくらい貯まるって」

「おかしい」

「不可能な事じゃない。でもね、た一君」

紗月はニヤリと笑った。

「私このままじゃ、いつか病気になる」

「お前は俺の事が好きなんだよな」

「うん」

「好きな人を脅す奴がどこにいる？ つまり、お前は俺の事を好きじゃないって事さ」

「違うよた一君。私はた一君が大好きだよ。でもた一君しか頼める人いないんだもん」

「そうかな？」

「そうだよ。だってた一君、優しいもん」

どう考えてもおかしい。こいつは本気で俺の事が好きなのか？

でも、そうか。しょうがないのか。

紗月は、頭がおかしくなっているんだから。

俺は沙織さんを殺す事にした。沙織さんの事は嫌いじゃないけど、別に好きでもない。だけど紗月の事は好きだった。いやそれは少し違う。昔の紗月が好きだった。俺は札幌に戻って、また昔みたいに紗月と幸せな時間を送りたかったし、それが出来ると何の根拠もなく思っていた。例えば紗月に彼氏が居たとしても、俺の元に戻ってきてくれると確信していた。結局いま紗月に彼氏はいなかったけど、それでも俺の確信通り、紗月は俺との再会を喜び、好きだと言ってくれた。

でも現実は何だか厄介だった。今の紗月は紗月じゃない。昔の紗月に戻ってほしい。

昔の紗月を取り戻す事が出来るのなら人殺しくらい平気だった。前居た学校ではずっといじめられていた。人生が楽しくなかった。恋人が出来たというのは嘘で、ただ見栄を張っただけだった。俺も経験済みという事しないと紗月と釣り合わないし、嫉妬してほしかった。なるべく過去と今のバランスが崩れないようにしたかった。それくらいに俺は恥ずべき時間を過ごしてきたのだ。

でも今俺の目の前には紗月がいる。昔仲良くしていた友達とも早速メルアドを交換した。香連高校はひどい学校だけど、それも一年の我慢だ。

新しい人生は順調だった。後は正常な紗月さえ取り戻せば俺の人生は久しぶりに平和で、穏やかで、楽しいものになる。

やるべき事は一つ。殺人ではなく自殺だと判断されるやり方で沙織さんを殺すこと。警察に捕まったら、人生

を取り戻すどころか終了してしまう。

方法は簡単に思いついた。俺と紗月と沙織さんは久しぶりの再会にテンションが上がり、勢いに乗って休日にドライブへ行く。沙織さんが背景イラストの練習のために良い景色を撮りたいというので、大自然を眺められるような場所を目的地に選ぶ。

そして俺達は良い景色を探し、写真を沢山撮り、最後に崖からの景色を撮ろうとする。そこで沙織さんは前に出すぎて落下して、死亡する。

シンプルだが良いプロットだと思った。変に小細工した方がバレやすい。沙織さんはニコンの一眼レフカメラを買った。パソコンに背景のラファイラストを沢山残した。

計画の実行はゴールデンウィークにした。あと三週間ほど時間はある。沙織さんはもう死ぬんだから好きに生きればいいのに、ひたすら家にこもって絵を描いていた。死ぬ寸前まで夢を追いたいと言っていた。どうしてそんなに夢を追うのか質問しても、「好きだから」と言われるだけだった。

お姉さんが死ぬ事は悲しくないのかと紗月に質問した事もあるが、「お姉ちゃんの意志を尊重する」としか言われなかった。やっぱり紗月はおかしかった。

紗月と再会してから三日後に寝た。童貞だとバレたが紗月は優しく頭を撫でてくれた。俺は紗月と結婚したいと思った。昔よくおままごとをして遊んだ。今度は本物のおままごとをするんだ。そう決めた。

ゴールデンウィークが訪れた。沙織さんは軽自動車をレンタルしてきた。目的地は小樽にあるオタモイ海岸。浜辺は岩場になっていて、切り立った崖が圧倒的な存在感を醸し出している恐怖の海岸だ。

オタモイ海岸を選んだ理由は特にない。ネットで適当に「北海道 崖」などのワードで検索したらオタモイ海岸のページがヒットして、画像を見た限り崖はとても険しく、自殺しやすそうだったからこの海岸にただただ。

俺と紗月は後部座席に座った。朝早く出発して、みんなの好きな音楽を大音量で流しながら小樽を目指した。途中でステーキ屋に寄った。沙織さんが全部奢ってくれた。

ステーキで腹を満たしてまた出発した。今度は音楽を流さずに、三人で色々な事を愚痴りあった。愚痴に飽きたらバカ話をして盛り上がった。紗月は楽しそうに笑っていた。紗月がまだ笑顔になれるうちに助けなきゃいけないと思った。

「ねえお姉ちゃん。死んだら生まれ変わりたい？」

紗月が唐突にそう聞いた。沙織さんは即答した。

「生まれ変わりたいほど人生が嫌だから死ぬのよ。もう生きるのはこりごり」

「そっか。そうだよ」

「うん。だってつまらないし、面倒だもん」

「何がどうなったら、人生は面白くなるのかな？」

沙織さんは窓を開けて、口に啜っていたタバコを外に投げた。

「知らないよ。そんなの」

赤信号で車を止め、沙織さんは付け加えた。

「いろいろ努力はしてみたけど、やっぱりダメ。アンタ達も、すぐに分かるよ」

オタモイ海岸に到着した。見上げるだけで小便漏らしそうな強烈な崖が辺り一面に広がっている。あの崖の上から落ちたら一発だ。しかし困った事が起きた。

崖に登れない。

海岸はかなり危険な岩場となっているしここ数年は崖崩れが頻発しているらしく、要するに死人が出るほど危

険な場所という事で、崖に登る道が通行止めになっているのだ。死ぬために来たというのに、皮肉なもんだ。

沙織さんは深刻な表情で言った。

「やっぱり自殺って、面倒くさいわね」

さて。どうしようか。溺死させるのが手っ取り早そうだが、沙織さんを海に押し倒し、体を押さえつけて殺したりしたら必ず他殺の証拠が残ってしまうだろう。いやどんな証拠が残るのか具体的には全く分からないけど、日本の警察は優秀なのだ。それにこんな所で溺死なんて、不自然すぎる。

俺が唸っているのを尻目に、紗月が言った。

「ここに来る途中のくねくねした道から崖に登れそうな所あったよ。ガードレール超えて、そこから崖まで行けばいいんだよ」

「本当？　じゃあ戻りましょう」

車に乗り込み、山道のようにくねくねした道を進み、途中で車を止めた。確かにこの場所から崖の方へ行けそうだった。しかし崖まで行くにはとてつもなく険しい山登りじみた事をしなくてはならない。

「やっぱり死ぬのって面倒くさい」

沙織さんはそう言って溜息をついたが、先陣を切ってガードレールを超えて行った。そんな行動力がまだ残ってるんなら、もう少し人生頑張ってみればいいのに。

死ぬ思いをして崖の上に登った。冷たい風。綺麗な広い海。しばらく俺達はその景色に圧倒されて黙り込んでいた。もちろん人間は俺達しか居ないし、前を見ても横を見ても後ろを見ても、自然しか目に入らない。大自然の中で孤立するのは、なかなか恐ろしい事だった。

沙織さんが首にぶら下げていたカメラを持った。そして、叫んだ。

「すっげー！」

また、叫ぶ。

「良い景色！」

紗月も叫んだ。

「お姉ちゃん凄いねこれ！　良い絵描けそう？」

「描けそう！　たっくん写真撮らないとね！」

沙織さんは色んな角度からカメラのシャッターを押しまくった。夢中で写真を撮る沙織さんはめちゃくちゃ楽しそうだった。

「そうだ！　二人の写真撮ってあげるよ！　ほら並んで並んで」

俺と紗月は海を背にして並び、手を繋いだ。空いている方の手でVサインを作る。

「はい撮るよー」

沙織さんは何度もシャッターを押した。俺達は色々なポーズを決めた。紗月はずっとはしゃいでた。後ろから俺に抱きついたり、両手でピースしたり。

写真を撮り終え、沙織さんが言った。

「沢山撮れたね。ねえ、私があのだ見つけてよかったでしょ。私が、ここに来る道、見つけたんだもんね」

紗月が頷く。

「アンタたち話に夢中で、外の景色なんて見てなかったもんね」

俺も頷いた。沙織さんは笑ったけど、なんか顔が歪んでた。

「よし。じゃあ私の事も撮ってよ」

紗月がカメラを受け取った。沙織さんが海を背にして立つ。

「んー。このアングルじゃうまく映らないかな？　もっと後ろに下がるね」

沙織さんは崖の端まで移動した。足が震えていた。もうそれ以上は後ろに行けそうになかった。

心臓が破裂しそうだった。

俺は前進した。

後ろにいる紗月がどんな顔をしているのか気になった。でも、振り返らなかった。

沙織さんの目の前まで移動した。顔と顔がくっつきそう。

「た一君」

「た一君はやめてください」

「ありがとね」

「いえ」

「紗月」

「なに？」

「私が居なくなっても、寂しくない？ 悲しくない？」

「寂しいし、悲しいよ。でも苦しんでるお姉ちゃんはもう見たくないし、お姉ちゃんの意志を尊重したいんだ」

「ありがとう」

「沙織さん」

「なあに？」

「よくよく考えてみたら」

「うん」

「ここは思ってたほど良い景色じゃない。もっと良い景色は他の場所に沢山あると思う」

「そうだね」

「残念です」

「うん」

「じゃあ」

「うん」

「お休みなさい」

俺は沙織さんを突き飛ばした。

ゆっくりと振り返る。紗月は笑っていた。小さな声で、言った。

「私とお姉ちゃんね、中一の時からずっと、別々の家で暮らしてたんだ」

背筋が寒くなった。紗月がまた口を開く。

「自分だけのうのうと実家で暮らして、夢見る乙女になって、自由に生きて、挙句の果てに死にたいだ？ 笑わせんなよ。私が、ずっと、どんな人生過ごしてきたと思ってんだ。処女奪われてよ、子供孕んでよ、叔母さんに虐待されてよ。あんな奴姉だと思いたくないね」

「紗月」

「なあに？」

「どうして、俺に頼んだ？」

紗月はスカートのポケットからスマホを取り出した。画面には何故か俺のメールアドレスが表示されていた。呆然。何も言えなかった。

「こっそりた一君のメールアドレス抜き取っておいたの。一番衝撃的な送信メール読んでやろうか？」

ああ。全てが、終わった。紗月が笑顔で、大きな声で、言った。

『今日紗月とセックスしてやったぜ！ 札幌に戻ってきた甲斐があった！ これで毎日やりまくり！ 札幌最高！』

「……」

「お前は一生、殺人者としてのレッテル背負って、苦しみながら生きろ」

まあそんな、深刻な話ではない。単純によくある話だ。

エッチがしたかった。その一言で全てが説明される。

## 第七話 シャバに別れを 遠山 紗月

---

駅のトイレに入った。親子が居た。母親が赤いポーチを肩にかけて十歳くらいの娘の髪を引っ張っていた。私に背を向けている母親は、見られている事に気づかず淡々と娘に語りかけている。

「どうして漏らしたの？」

「ごめんなさい」

「あともう少しだったのに。あともう少しで間に合ったのに」

「ごめんなさい」

「貴方は腐った精子から産まれた出来損ないのクズよ」

「精子ってなあに？」

「もうやだ。本当にやだ。なんで私が小便もらしたガキの世話なんてしなきゃいけないの？」

「ごめんなさい」

「産まなきゃよかった」

「うん」

「アンタ」

「うん」

「気持ち悪いわ」

母親は娘を思い切り蹴飛ばし、個室の中に入った。

女の子は何か訴えるような悲しげな目つきで私を見つめてきた。

どうして？

そんなセリフが聞こえてきそうだった。

毎日あんな調子なんだろう。

家に帰ったら何をされるんだろうか。

女の子が口を開いた。

「産まなきゃよかったんだってさ」

「ん」

「じゃあ、なんで産んだのかな？」

私は女の子の頭を撫でた。

「コンドーム付け忘れて、妊娠して、中絶するのが怖かったから。多分」

「ふうん」

女の子の腕を掴み、私は言った。

「私の家に来る？」

女の子は頷いた。

「少しでも良くなるなら」

「知らない人に付いてっちゃダメって、お母さんに言われなかった？」

「大丈夫。言われてない」

「そっか。言われてないなら、仕方ないね」

高校を卒業して叔母さんの家を出た。叔母さんは事あるごとに私に暴力をふるった。特に援交での収入が少ない時はいつも以上に殴られ、蹴られた。六年間よく耐えてきたと思う。

今は放火事件で全焼したものの、空き家を改装して新装オープンしたイノンチプでバイトをしている。月の収入は約十二万円。家賃が安い札幌に住んでるとはいえ、十二万円での一人暮らしは相当キツイ。寝て食うだけの

生活が精一杯。援交で稼いだ貯金はとつくのとうに底を尽きた。でもこれ以上必死こいて働く気はなかった。援交もやめた。

女の子の名前は桜井未来というらしい。なかなか皮肉が効いた名前だった。年は十一歳。

未来ちゃんのためにハーゲンダッツのアイスを買ってあげた。未来ちゃんはアイスを平らげるとゲーム機に注目した。お母さんにゲーム機をねだったら顔面をぶん殴られた事があるらしい。私はぶよぶよの接待プレイで未来ちゃんを喜ばせた。

ゲームをしている間に夕方になった。私は未来ちゃんを部屋に残してコンビニ弁当を買いに行った。いつもは安いものを買うけど、今日は六百八十円の焼き肉弁当とジュースを買った。

部屋に戻ると、未来ちゃんは部屋を漁る事なく、おとなしくゲームをしながら私の帰りを待っていた。

「ご飯、買ってきたよ」

焼き肉弁当を貪り食う未来ちゃんを眺めながら、私は考え込んだ。

これから、どうしよう。

とにかく養護施設？ みたいな所に送るべきだろうけど、しかし。

「ちょっと体見せてくれる？」

「いいよ」

未来ちゃんの服を脱がして体の傷を確認してみた。背中とお腹に擦り傷や小さな痣があった。

「この傷、どうしたの？」

「お母さんにやられた」

「うーん。なるほど」

この程度の傷では虐待の証拠にならない。母親が「転んだんです」とか適当な嘘を言えばまかり通ってしまう。

「お母さんにいつもどんな事言われてる？」

「クソ野郎とか、呪われた子とか、デスノートがあつたら真っ先に殺してるとか、産みたくなかったとか、何も出来ない間抜けとか、将来絶対ビッチになるとか」

「意味、分かる？」

「よく分からない」

「ご飯はちゃんと食べてる？」

未来ちゃんはガリガリだった。骨が歩いているような子だった。

「お米と味噌汁、たまにくれる。でも何もくれない日もある」

「お父さんは？」

「いない」

「お母さんはお仕事してるの？」

「んー。分かんない。いつもお家にいる」

じゃあ生活保護でも受けてるのかな？

「学校は？」

「行ってるけど、高校には行かせないって言われてる。お金かかるから」

高校まで行かせてくれた叔母さんが善人に思えてきた。

「文房具とか、学校で必要な物はどうしてるの？」

「友達がくれる」

「人生、楽しい？」

「大変」

「お母さんの事、殺したいと思う？」



「出来れば」

暴力は受けていないけど、言葉の暴力は相当に受けている。ご飯はまともに与えられない。働きもせず生活保護を受けている母親に経済力はない。高校に行ける見込みはゼロ。学校で必要な物さえ与えられていない。

これが虐待と言わず、なんという。少なくとも大人に保護されるべき権利を、この子は持っている。でもその権利は捨てられ、ひどい扱いを受ける日々。

でもこれだけの条件で養護施設は未来ちゃんを受け入れてくれるのだろうか？ ちょっと、キツイかも。

私は台所からコップを二つ持ってきてオレンジジュースを注いだ。未来ちゃんは一気飲み。私は一口飲んだ。

「紗月お姉ちゃん、お母さんの事、殺してくれるの？」

「話が飛躍したわね」

「私、お母さん、殺せるよ」

未来ちゃんは赤いポーチの中からナイフを取り出した。私は漫画のようにジュースを吹き出した。

「何それ!？」

「盗んだ」

「は？」

「私、よくお母さんに万引きさせられてるの。惣菜とか、お弁当とか」

「それで……ナイフも？」

「この前スーパーでお寿司盗んだ。その時、ついでに」

決定的だった。母親に万引きをやらされてるなら、十分に養護施設に入る資格があるだろう。それにいま未来ちゃんは殺せるといった。十歳の女の子からこんな言葉が簡単に出てくるのなら、施設の人間だって放っておかないだろう。

「未来ちゃん。今から私の言う事、よく聞いてね」

「うん」

「貴方のお母さんは、お母さんの資格を持っていない」

「うん」

「貴方は施設に保護されるべきだし、これ以上苦痛を味わう必要はない」

「うん」

「だから、私は未来ちゃんを養護施設に連れて行く」

「養護学級？」

「いや違う。えーと……。私もよく分かんないけど、未来ちゃんみたいにね、お母さんにいじめられてる子どもを守ってくれる施設があるの」

「私はその施設って所で住むの？」

「そうだよ」

「じゃあ、もうお母さんにいじめられなくて済むの？」

「そうだよ」

未来ちゃんは両手でコップを握りしめながら、言った。

「そこでは、お小遣いもらえるのかな？」

「いや、知らないけど……」

ふと思った。施設に入って身の安全が保証されても、他の子達のように贅沢は出来ないだろう。規律正しい集団生活の中で生きていくことになる。両親に守られ、甘やかされ、ぬくぬく生きてるガキは沢山いるけど、この子はぬくぬく出来ない。

それは、可哀想だ。

「未来ちゃん。施設に入ったら色々大変な事があると思う」

「うん」

「だからお姉ちゃんがね、施設に入る前に、色々な所に連れて行ってあげる」

「本当!？」

「うん。遊園地でも、どこでも」

未来ちゃんは私に抱きついてきた。

私はこの子を守ろうと誓った。施設に入っても毎日のように会いに行こう。私は一人でこんな大きな子どもを育てられる人間ではないけど、影で支える事は出来る。

私のお腹は一時満たされ、そして空っぽになった。

ゲロ吐きそうになる気色悪い事実が、少しだけ見えなくなった気がした。

そうだ、もし私が中一の時に子供を産んでいたら、その子はいま何歳だろう？ 私はあと数日で二十三歳になる。つまり、そう、十一歳のはず。

ますます、現実がどこかにぶっ飛んでいく気がした。

遊園地、ゲーセン、映画館、カフェ、スイーツ屋、雑貨屋、オモチャ屋、色々な所に連れて行き、色々な物を買ってあげた。もちろん全ての場所でクレジットカードを使った。これは久しぶりに援交をして口座の残額を増やす必要があるだろう。

未来ちゃんは二十四時間フルタイムで爆発的に喜んでいて、何にでも興味を示し、はしゃぎ、走り回った。未来ちゃんを見ていると私も楽しい気持ちになった。幸せだった。

未来ちゃんは良い子だった。私がバイトに行っている時はおとなしく家で待っていてくれる。だから安心して仕事が出来た。虐待されてるのにも関わらずあんなに良い子でいる事が信じられないくらいだった。

夜の九時。仕事帰りに自転車を飛ばしてスーパーへ寄った。未来ちゃんに手作り料理を振る舞ってやろうと思った。でも未来ちゃんにお金を使いすぎたせいで、安物の食材しか買えなかった。

店を出た時、駐車場で可奈子を見かけた。可奈子はバイクに寄りかかりながらタバコを吸っていた。頭にはごついヘッドホンを付けていた。私は可奈子のブログを毎日見ているから知っている。あれはデンマーク製で、二十万円のヘッドホン。可奈子は高給取りなのだ。

店の方からカッコイイ男が近づいてきた。二人は親しげに何か会話をして、キスをした。男がバイクにまたがり、可奈子が後ろに乗って男の腰にしがみついた。バイクは勢い良く走りだした。こっちに近づいてくる。

目の前を通り過ぎた。可奈子は、私に気が付かなかった。

片手にはスーパーの袋。料理を振る舞う相手は、見ず知らずの子供。

可奈子がああやって楽しい人生を送っている裏で、私は何をしている？

笑っちゃうよね。

おままごと。

家に帰って料理を作り、未来ちゃんに食べさせた。未来ちゃんはある箸の持ち方でガツガツと食べた。美味しい？ って聞いたら「口に入る物はなんでも美味しい!」と言った。貧乏なアフリカ人も納得してくれそうな答えだった。

スマホがぶるぶると震えた。メールが一件。「結婚しました」という件名。私はメールを削除した。おままごとの邪魔すんな。

未来ちゃんは私の料理を完食した。その後お風呂に入れてやり、二人で映画を観た。またスマホが震えた。可奈子からメールが来ていた。

『誕生日おめでとう。今どこで何してる。飯ちゃんと食ってるか』

そうか。私はこのセリフを誰かに言いたかったのか。

飯、ちゃんと食ってるか。大人のセリフだ。

みんな色々ありながらも立派な大人になった。私はまだガキだった。子供の頃からクズだった。理不尽な不幸は沢山あった。でもそれは言い訳にはならない。藤田さんは昔言っていた。

『クズってのはどこにでもいるもんだけどねえ、難しい言葉を使ったり、いちいち哲学的な解釈を自分に与える必要はないのさ。答えは簡単よ。クズはクズ。それ以上でも以下でもない。クズが言い訳して許されると思ったら大間違いさ』

似たような言い回しは沢山聞いた。でも難しい言葉を使ったり、いちいち哲学的な解釈を自分に与える必要はない、という文句は一貫していた。

そう、私は、ただのクズ。深い理由も哲学的な解釈も必要ない。私はクズですの一言だけで遠山紗月という人間を説明できる。

お姉ちゃんは突き飛ばされた直後、悲鳴をあげた。

いやだ。助けて。

それがお姉ちゃんの、最後の言葉。

私は多分、永遠にクズを突き通す。

「ねえ未来ちゃん。まだどこか行きたい所ある？」

「舞台観に行きたい。私ね、あのね、いつか役者になりたいの」

「役者か。良いね。私も役者目指せば良かったかも」

観劇が最後のおまごとなる。劇を観終わった後、私は未来ちゃんを施設に連れて行く。そして私はまた、一人になる。

劇場の前で全てが終わった。私と未来ちゃんは手を繋いで歩いていた。この舞台かなり人気らしいよ楽しみだねとか言って、二人ではしゃいでた。後ろから誰かに肩を叩かれた。未来ちゃんの母親だった。逃げようとしたけど、母親はすぐに未来ちゃんの腕を引っ張り抱きしめた。

「誘拐？」

私は黙っていた。母親は警察に電話した。すぐに警察がやってきた。母親が事情を話した。確かに立派な誘拐だった。

私は未来ちゃんが母親にされていた事を全て話した。警察官は笑った。

「君は頭がおかしいのか？」

母親は未来ちゃんの手を繋いでいた。未来ちゃんは泣いていた。

私は豪快に腹を抱えて笑った。

「いやーすみません。可愛い子だったので、つい連れ回しちゃいました」

可哀想な女の子を匿って、遊ばせていました。そう説明するよりも、自然で合理的と思える説明だった。私も少しは社会に順応し、大人になれたらどうか。

私は刑務所に入った。ついに前科者になった。

門を通り、振り返り、灰色で無機質で巨大な建物を見上げた。門の前に立つ男の人は無表情で私を見ている。

「お花」

「はい？」

「花屋さん、どこにありますか」

男は近場の花屋を教えてくれた。

「あの子に？」

私は頷いた。

「ひとつ」

「はい？」

「これだけは、言わせて下さい」

「はい」

「私はただ、人を助けたかっただけなんです」

涙が溢れてきた。私は立ってられなくなって、その場に崩れ落ちた。男は私の前に手を差し伸ばした。手を掴み、立ち上がる。男が無理やり作ったような笑みを浮かべる。

私は看守に向けて深々と頭を下げた。

「お世話になりました」

お墓の前に花束を置いた。私が刑務所に入った翌日、未来ちゃんは母親に殺された。

どこにも行きたくなかった。ていうか行く場所なんてなかった。なんかもう力尽きて、座り込んだ。

歩きたくない。もう疲れたし、色んな事が面倒くさい。

空は青色で、雲は無く、秋の風が気持ち良かった。

「あー」

風が気持ち良いと、それだけで子どもの頃を思い出す。でも具体的な事は思い出せない。ただとにかく、昔を感じるだけ。

影が出てきた。顔を上げると、そこには、可奈子がいた。

「紗月」

「久しぶりだね」

「これからどうするの」

「なんでここに居るの」

「刑務所の前に車停めて張り込みしてた」

「わざわざ？」

「そう、わざわざ」

なんて言えばいいのか分からなかった。可奈子は私の顔を見据え、言葉を続けた。

「で、これからどうするの」

「適当な男と結婚する」

「それで？」

「子どもは作らない」

「で？」

「年を取る」

「何をしながら年を取る？」

「パート」

「年を取りました。それからどうなる？」

「死ぬ」

「なるほど」

「当たり前でしょ」

「要するに」

可奈子が私の前に座り込んだ。

「それが嫌なんだろう」

可奈子はパーカーのポケットからタバコを取り出した。銘柄はセブンスターからエコーに変わっていた。

「吸う？」

「うん」

可奈子が差し出したタバコを啜えた。可奈子がライターで火を付けてくれた。ゆっくり吸った。可奈子はタバコを手に持ったまま、呟いた。

「なあ紗月。私ね、仕事辞めたんだ」

「なんで」

「色々」

「じゃあ今、何してるの」

「フリーター」

「そっか」

「うん。ねえ、紗月」

「なに」

「いつか、気楽に死のう。いつかね」

手が差し出される。一日に二度も、他人が私に手を差し伸べてくれた。

そして私はやっぱり、その手を掴み、立ち上がる。

私は可奈子に支えられながらゆっくりと歩き、お墓を出た。死の場所に背を向けながら、人の感触を感じながら、私は止まる事なく、歩いた。

クズがクズを生む。そしてクズはきっと必ず、間違いなく、人を知らない。